

奈川小学校旧入山分校 記録保存調査報告書



令和 8 年 3 月

松 本 市
公益社団法人長野県建築士会



1.旧入山分校 登校道路入口にある看板と、登校道路 令和7年(2025)9月



2.旧入山分校校門(西側より)

令和7年(2025)4月



3.旧入山分校外観(西南より)

令和7年(2025)4月



4.旧入山分校外観(南側)

令和7年(2025)4月



5 .旧入山分校外観(左:校舎 右:宿直室)

令和7年(2025)4月



6 .旧入山分校外観(左:宿直室 右:増築便所棟)

令和7年(2025)4月



7.旧入山分校内観 体操場(南東面)

令和7年(2025)9月



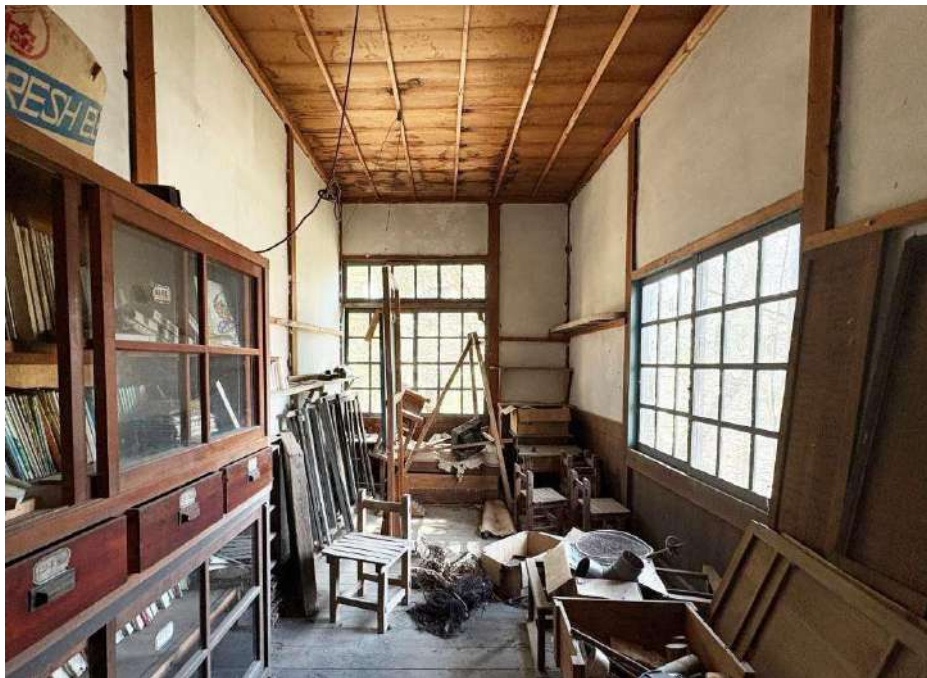
8.旧入山分校内観 教室(東西面)

令和7年(2025)9月



9.旧入山分校内観 裁縫室(西北角)

令和7年(2025)4月



10.旧入山分校内観 職員室(西面)

令和7年(2025)4月



11.旧入山分校内観 便所(東面)

令和7年(2025)4月



12.旧入山分校内観 宿直室南室(南西面)

令和7年(2025)4月



13.旧入山公会堂アプローチ及び外観正面(西側より) 令和7年(2025)4月



14.旧入山公会堂外観(北西より)

令和7年(2025)4月



15.旧入山公会堂内観 東側の和室(南西より)

令和7年(2025)4月



16.旧入山公会堂内観 西側の和室(南西より)

令和7年(2025)4月



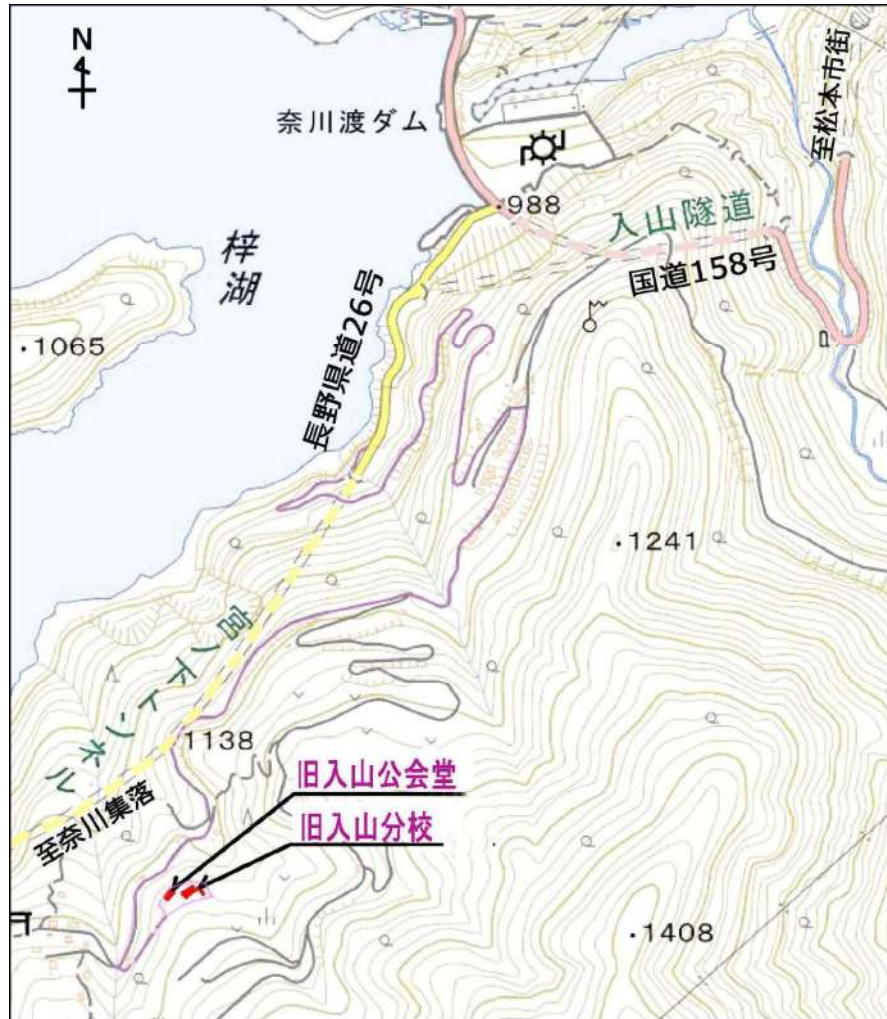
17.旧入山公会堂内観 台所(南東より)

令和7年(2025)4月



18.旧入山公会堂内観 玄関(南西より)

令和7年(2025)4月



位置図(国土地理院データより)



周辺図(国土地理院データに加筆)

※入山区運営での最初の仮分教場と考えられる場所については、「お宮の近くの百瀬代次郎の空き家」(学校沿革誌)を手掛かりに、法務局の土地台帳で百瀬大次郎所有の地番であると判断した。 ※明治期は名前表記の漢字が重要視されていないため、同一人物であると判断した。

例 言

- 1 本書は令和7年4月から令和8年3月まで行われた「奈川小学校旧入山分校」の調査報告書である。
- 2 松本市から公益社団法人長野県建築士会が委託を受け、長野県建築士会松筑支部が調査を実施した。
- 3 調査は「奈川小学校旧入山分校」の建築及び史料の調査を行い、記録保存を目的に実施された。
- 4 掲載の写真については、特記のないものは調査者の撮影による。
- 5 調査担当者・写真撮影担当者・執筆担当者は以下のとおりである。
 - ・建物調査及び写真撮影(五十音順)
赤羽直美 小笠原み江 長谷川繁幸 米山文香
 - ・報告書作成(図面作成含む)
米山文香
- 6 本書の作成に当たり、次の方々、団体からご指導、ご協力を賜った。
忠地愛男氏(昭和46年3月卒業、本校統合まで入山分校に在籍)
忠地義光氏(建築当時の設計図、工事報告など)
松本市アルプスリゾート整備本部次長 忠地智司氏(P16写真)
松本市奈川小中学校

凡 例

- 1 本文の用語は、現代仮名遣い、常用漢字を原則とした。ただし、固有名詞・専門用語と、一部特別な表現については、その限りではない。
- 2 本文の寸法標記は、原則としてメートル法を用いた。
- 3 年号は原則として和暦年号を用い、西暦年号を()書きで併記した。
- 4 本文中の人名(歴史的人物)は敬称略とした。

目 次

位置図

口 絵

例 言

凡 例

1	調査の目的と概要	
	(1)調査の目的	1
	(2)調査の概要	1
2	敷地の概要	
	(1)松本市奈川地区	1
	(2)入山分校建設地(入山)	2
3	沿革	
	(1)奈川小学校の沿革	3
	(2)入山分校の沿革と廃校後	6
	(3)入山分校の建設	6
4	配置と建築の特徴	
	(1)敷地と建築の構え	8
	(2)建築の仕様と特徴	9
	(3)類例建築	13
5	人物・学校の思い出	
	(1)教員 高宮萬蔵	14
	(2)入山分教場建築時寄付者(竣工式招待者)	14
	(3)元在校生からの聞き取り他	15
6	隣接旧入山公会堂	20
7	まとめ	22
8	参考文献	23
9	現況写真	24
10	資料・設計書・仕様書・図面・現況平面図	28

1 調査の目的と概要

(1)調査の目的

奈川小学校旧入山分校は、昭和8年(1933)に奈川尋常高等小学校入山分教場として新築され、昭和44(1969)年に本校(奈川小学校)に統合されるまで、約36年間、山間地の子どもたちの教育の場としてまた、閉校後も地域住人の集いの場、地域おこしの場として平成前期頃まで使用されていた。以後は有志による維持管理が行われていたが、高齢化などにより継続が困難となり、所有している松本市としても維持管理の継続を断念し、形があるうちに記録保存調査を行うこととした。

本調査では、分校及び隣に建つ入山公会堂について、現地調査により現況を確認し、建築当時の状況や遍歴等の記録を収集、記録をした。

(2)調査の概要

調査対象の概要

名 称	奈川小学校入山分校	入山公会堂
員 数	1 棟	1 棟
所 在 地	松本市奈川下中平4966	松本市奈川下中平4966
構造/形式及び 建築面積	木造/寄棟鉄板葺き屋根 地上1階 建築面積240.14㎡	木造/寄棟鉄板葺き屋根 地上1階 建築面積66.25㎡
所 有 者	奈川村⇒松本市	奈川村⇒松本市
建設年/大規模改修等年	昭和8年(1933)※増築平成3年頃	昭和40年代前半か

本調査は、松本市の発注にて、公益社団法人長野県建築士会が受託、長野県建築士会松筑支部が調査を実施し、令和7年(2025)4月から令和8年(2026)2月にかけて現地確認及び写真撮影、史料収集を行い、まとめたものを印刷物とデジタルデータ(DVD)で納品した。史料収集は、松本市立図書館、松本市文書館、長野地方法務局松本支局、国会図書館デジタルライブラリーを主として行った。また、元在校生からの聞き取り調査を行い、地元の方から設計図など史料提供を受けた。

2 敷地の概要

(1)松本市奈川地区

奈川地区は松本市の西南方に位置し、およそ東西11 km・南北14 km、面積は117.65 km²で、そのほとんどが山林で林業が盛んであった。市街地から国道158号線を梓川に沿い上高地方方面へ進み、奈川渡ダム手前の入山トンネルから県道26号(野麦街道)に入り南下した先に旧奈川村の中心地がある。高ソメキャンプ場、野麦峠オートキャンプ場、野麦峠スキー場など、自然の中でのアウトドア施設が点在し、白樺峠は、シーズンにはタカの渡りを間近に見られる貴重な名所である。標高が1200mと高く気温の寒暖の差があり美味しい蕎麦が穫れ、とうじ蕎麦が郷土食として知られる。この地域で代々守り育てられてきた在来種(品種改良がされていない野生種)の蕎麦は一般的な栽培品種よりもひと回り小粒で、収穫量が少なく市場にほとんど流通せず、「幻のそば」とも呼ばれ、大変美味で知られている。主な産業は農業・林業・観光業・建設業である。人口(令和8年2月現在)は544人(288世帯)で減少傾向である。

野麦峠は、古くから太平洋側と日本海側とを結ぶ交易路として利用されてきた。峠の麓にある奈川は、運搬を担う人と牛の中継地として重要な場所であり、悪路に強い牛による運送業は、貴重な産業として奈川の地域を支えた。明治初期から昭和初期まで、飛騨の村々から峠を越えて松本、岡谷・諏訪地域の製糸工場へ出稼ぎに行く工女が泊まった旅籠が点在し、そのうちの1軒である「宝来屋」(江戸後期築)が島立の松本市歴史の里に移築保存され、入山の集落にも明治元年築の「松田屋」が保存整備されている。



宝来屋(松本市歴史の里)



松田屋(入山)

(2)入山分校建設地 入山(にゅうやま)

古くは飛騨国と信濃国を結ぶ街道の沿線に、およそ700年前に発祥したと推定される入山集落は、県道26号線を奈川渡ダムの付近で旧野麦街道に入り坂道を登った先にある。坂の脇には、地区住人により桜などが植えられ、花や紅葉の季節は良い景観となる。集落入口付近には今でも6世帯が暮らしている。そこを過ぎるとポツリポツリと廃屋が点在し、青木神社や旅籠の松田屋があり、入山宿の面影を忍ばせている。旧入山分校は廃屋(旧高宮萬蔵宅)の裏手にある山道(通学道路:未舗装)を登った先に門柱があり、その先に校庭、奥に校舎、宿直室(教員宿舎)がある。

入山は、林業と、炭焼き、養蚕をしている人が多かったという。敷地の周りは、今ではすっかり木が茂っているが、山の斜面の上の方まで桑、豆などの畑が広がっていて、上の方は蕎麦が多かった。また、この地域ならではの板倉(土蔵のような土塗りでなく、丸太や厚板を組み上げた壁を持つ倉庫)が何棟みられる。昭和30年代頃から外に働きに出る人が多くなり、昭和39年(1964)から44年(1969)まで、奈川渡ダム(「安曇ダム」)に決まっていた名称を奈川村民の要望で変更した)の建設工事が行われ、その間、建設関係者(東電や間組の社員)のうち家族連れで暮らす者もいたが、工事が終わり、人口は過疎化の一途をたどっている。



左上下：板倉
その他：入山宿の廃屋
平成27年(2015)10月撮影



3 沿革

(1) 奈川小学校の沿革

江戸末期、奈川は尾張藩に属し、木曾代官の支配下にあった。17世紀から木曾の寺で教育をしていた記録が残っており、奈川地区もその影響を受けていたと考えられる。山深い地域にもかかわらず、大圓山林照寺の無外全規(小山の原に功德碑がある)が寛正2年(1790)に始めた寺子屋があった。明治5年(1872)まで80年間にわたり引き継がれて寺子屋が開かれており、年に80人が学んだという。その他にも寺子屋(私塾)が、明治5年時点で奈川村内に4ヶ所あった。(下表)

◎奈川村にあった寺子屋・私塾(西筑摩郡誌による)

※林照寺は歴代住職が引継

教師・師匠	開所	閉所	教師数	子弟数(隆盛期)
林照寺 無外※	寛政2年(1790)	明治5年(1872)	1名	90人
大矢半九朗	文化5年(1808)	文政10年(1827)	1名	18人
勝山繁藏	文化4年(1807)	文政8年(1825)	1名	38人
奥原作美	文政6年(1823)	安政3年(1856)	1名	50人
勝山勝次郎	文政8年(1825)	天保14年(1843)	1名	25人
奥原徳兵衛	文政9年(1826)	安政元年(1854)	1名	15人
忠地守右衛門	文化2年(1805)	天保12年(1841)	1名	30人
勝山喜運治	安政2年(1855)	明治5年(1872)	1名	40人
奥原貞一郎	安政3年(1856)	明治5年(1872)	1名	20人
忠地柳左衛門	嘉永6年(1853)	明治5年(1872)	1名	30人

明治5年(1872)8月3日に学制発布されたが、奈川地区では同6年(1873)5月に第2大学区第19番中学区第137番小学奈川学校が、黒川渡の島口伊平宅に開校し、支校として春輝学校が大平の勝山藤兵衛宅に、覚民学校が角ヶ平の忠地元右衛門宅に開校した。入山分校はこの覚民学校が源流である。(文部省は全国を大中学区に分け、県はその中で小学区を設けた。木曾は第2大学区第19中学区であった)3校とも個人宅を借り上げた仮教室であった(私塾を学校にはしなかった)。この3校の中では春輝学校がいち早く、明治8年(1875)に校舎を新築した。奈川学校は明治20年(1887)に西筑摩郡第5番学区簡易小学校黒川渡学校、覚民学校は簡易小学校角ヶ平学校、春輝学校は簡易小学校寄合渡学校と改名、その後も小学校令により黒川渡校は、簡易小学校、尋常小学校と冠を改め、明治28年(1895)に校舎を新築した後、明治30年(1897)に奈川尋常小学校、大正12年(1923)に奈川尋常高等小学校(本校)となる。本校に対し他2校は分教場となったが、角ヶ平は明治29年(1896)に山崩れで被災し、田ノ萱の奥原源右衛門宅に仮校舎を置いた後、翌30年(1897)6月16日に松竹に校舎を新築し松竹分教場となった。これに先立ち間借りで入山分教場が仮開校している。本校と寄合渡分教場は明治42年(1909)に校舎を増築、本校には1月15日から3月25日までの季節授業の奈川農業補修学校(修学年限2年)が付設された。

明治期における学級と教科は、当初はそれぞれ1学級ずつ計3学級で、漢学の初歩・読書・算術を教え始めた。明治15年(1882)、小学校教則が定められ、修身・算術・習字・作文を教えるようになった。明治25年(1892)、小学校令改正により尋常科が3ヶ年となって、体操が教科に加わり、同27年(1894)には尋常科が4ヶ年となった。明治34年(1901)、小学校令の改正により教科が修身・国語・算術・唱歌・体操となり、明治41年(1908)には尋常科が6ヶ年となって、教科に地理・歴史・理科・図画・裁縫が

加わった。明治45年(1912)に分教場の5、6年生は本校へ編入され、分教場は1～4年生のみとなった。

明治42年(1909)の本校の増築に伴い、松竹分教場は閉鎖しようということになり、これに対し、松竹、角ヶ平、田ノ萱部落の人が分校を存続しようと自主休校で反対した(学校沿革誌P98)。

大正2年(1913)に寄合渡分教場に屋内体操場が新築された。大正6年(1917)に松竹は松竹分室と改名、入山分教場が正式開校した。大正12年(1923)に尋常科6ケ年、高等科2ケ年の計8学級となった。

昭和5年(1930)、松竹分室は廃止となった。その後、戦中は国民学校令により3校とも国民学校を冠し、分教場は分校と改められた。昭和20年(1945)に大水害により寄合渡分校が校舎1棟と体操場1棟を流失した。昭和26年(1951)に新校舎ができるまで、神社拝殿と教員住宅で授業を行った。終戦後の昭和22年(1947)に西筑摩郡奈川小学校(本校)・入山分校・寄合渡分校となり、翌年には西筑摩郡から南安曇郡に編成されたため、南安曇郡奈川小学校(本校)、同入山分校、同寄合渡分校と改名した。昭和40年(1965)になるとダムの建設による田ノ萱、角ヶ平集落の水没に伴って村民の他市町村への流出があり、若者が減り児童数が減少することが明らかになる中で、3校の運営が負担との判断で統合が決まった。昭和44年(1969)に統合新校舎が落成し、奈川村立奈川小学校が発足、分校は閉鎖された



旧黒川渡校

『学校沿革誌』より転載



旧奈川本校 (S2年築校舎)

『奈川学校開校百年記念誌』より転載



旧寄合渡分校(S20年水害後) 『奈川学校開校百年記念誌』より転載



旧寄合渡分校
(S26年築校舎)

『学校沿革誌』より転載



左:旧入山分教場
(S8年以前仮校舎)
(平成27年撮影)



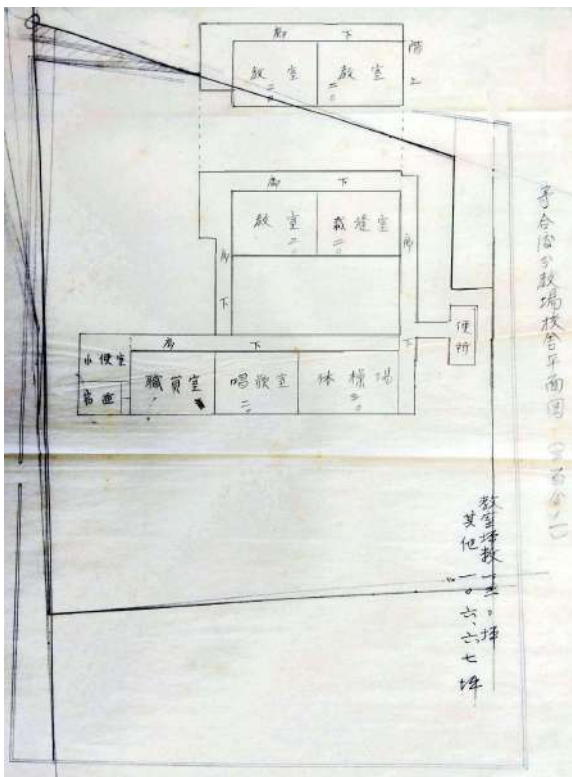
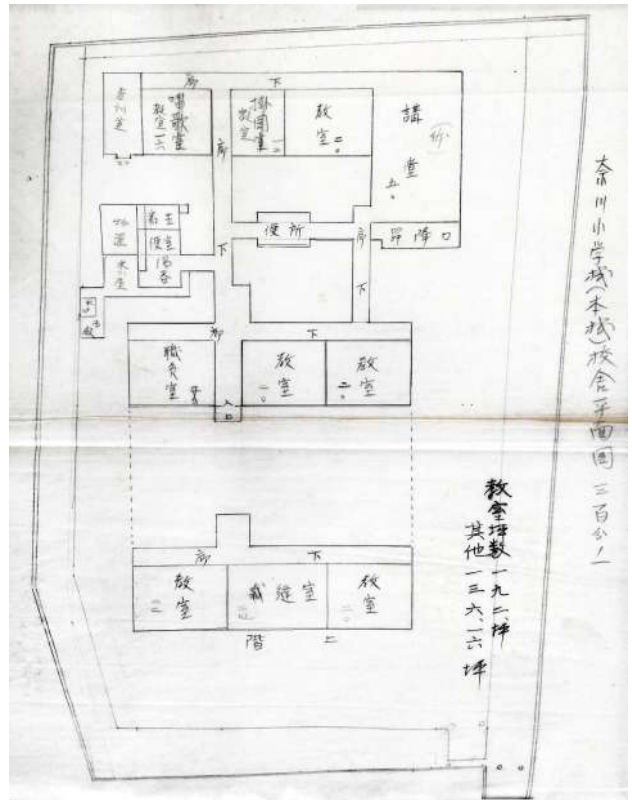
旧松竹分室(閉鎖後公会堂時代)
『奈川学校開校百年記念誌』より転載

『昭和六年 學校臺帳』(松本市文書館蔵)より

○奈川小学校(本校)校舎諸室(右図)※昭和2年11月23日落成校舎

- 1階：昇降口、講堂、職員室、青訓室、
教室×5(裁縫室・唱歌室→教室)、
便所、宿直、使室、木小屋、湯呑、
湯殿(水タンク)、物置、
- 2階：教室×2、裁縫室

※青訓室(青年訓練所):第一次大戦後に陸軍省が文部省に働きかけ、小学校卒業後の男子に修身、職業科、教練等の社会教育を施すためつくられた。



寄合渡分校(昭和20年頃撮影) 『写真で見ることの松本』より転載

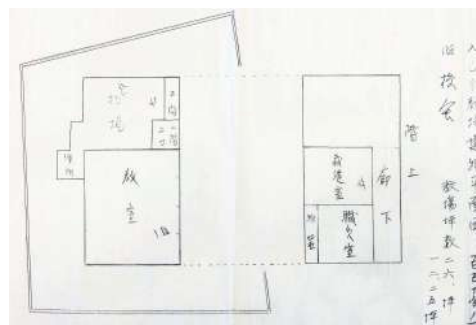
○奈川小学校 寄合渡分教場校舎諸室(上図)※昭和2年10月20日落成校舎

- 1階：体操場、唱歌室、職員室、裁縫室、教室、便所、小使い室、宿直室、便所 ※昇降口不明
- 2階：教室×2 ※階段は恐らく廊下の突き当たり(左側)部分と思われる。

○奈川小学校入山分教場校舎諸室(右図)

※忠地宅間借り仮校舎(建築年不明)

- 1階：昇降口(土間)、控室、教室
便所
※控室に体の文字、体操場兼用?
- 2階：裁縫室、職員室、物置
※階段は土間横の2階上口か?



※各図面の縮尺は元図面を任意縮小しているため同一ではありません。

各図面は『學校建築関係綴』(松本市文書館蔵)より転載

(2)入山分校の沿革と廃校後

明治29年(1896)7月23日の山崩れで角ヶ平簡易小学校が被災し、翌年6月16日松竹に新築移転したが、入山区の児童はこれ以前、明治27年(1894)から、入山区の運営による仮の分教場に通っていた。子供の足では冬場の通学がままならないことが最大の理由であろうが、他地区と離れていることにより区内のまとまりが強く、明治5年(1872)まで忠地柳左衛門の寺子屋(私塾)があり、地域での学業の伝統を守りたいという意味もあったのではないかと考察する。仮分教場の運営に当たっては、元資無尽で皆で金を出しあい、資金を作った。青木神社の近くにあった百瀬代次郎が所有する空き家の8畳と6畳の部屋を使っていた(位置図に示した場所は土地台帳(法務局蔵)で百瀬大次郎所有地)。教師は高宮民弥で、生徒は12~3人くらいであった。大正6年(1917)に正式に村の分教場として設置され、この頃には少し下った場所(旧入山分校の下の道路沿いにある忠地勘一所有の建物)を使っていた。この建物は令和8年(2026)現在も状態は良くないが存在している。昭和8年(1933)、場所を移して校舎が新築された。校舎に併設で宿直室(教員宿舎)も造られた。昭和11年(1936)村事務報告によると、児童数は30名で就学率は100%である。戦中戦後、前述のように校名の変遷があり、昭和44年(1969)に本校に統合され、廃校となった。

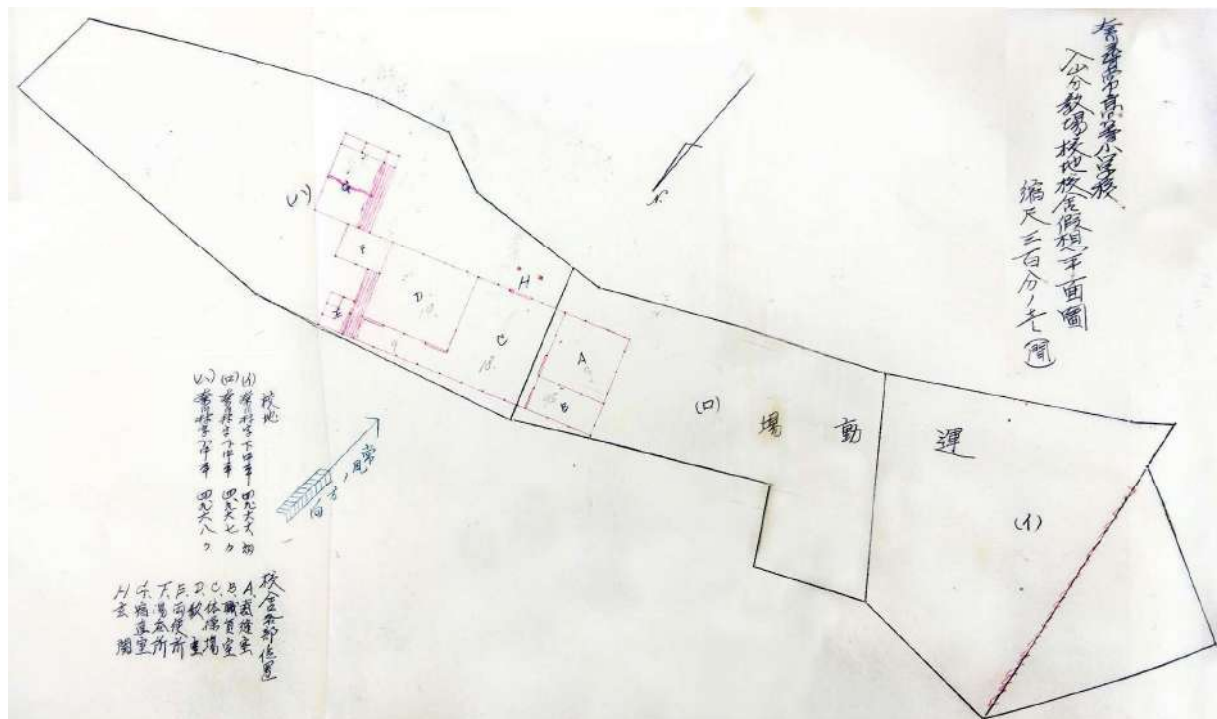
廃校後はしばらく地区の行事などで使われていた。また、奈川渡ダムの工事により地盤が不安定になり、入山危険対策移住が27戸生じたが、そのうちの2戸が、宿直室及び、隣接する公会堂に暮らした時期があった。昭和53年(1978)頃、地元で宿泊体験などでの利用があり、平成3年(1991)、村で農山村体験学習施設として整備(便所棟の増築・湯呑室の改修、他に廃屋1棟改修)をして活用された。周辺の空き家2棟も1年早く改修し活用に取り出して、分校の他、「つたや」「下道荘」「むねむき山荘」が、平成前期くらいまで使われたようである。これらのうち「つたや」はしばらく個人で継続営業をしていた。分校は数年前まで地域の有志で軒先などの補修や草刈りなどの保全活動がされていた。

(3)入山分校の建設

昭和7年(1932)、奈川村は入山分校の建て替えを計画する。翌年村長から県知事宛に提出した書類には、建て替えの理由として、「校舎位置は狭隘にして周囲の地勢急斜の為拡張の余地無く校地として適当ならず。且校舎は明治30年の建築にして廃頽その極みに達せる」としている。学校建て替えの指定を受けられた場合には、直ちに土地買収をする用意があり、7年度より予算を計上し、寄付も募り、不足分は8年度の予算に計上し、議決済みであるとしている。7年度の歳出予算として、建築費1,250円が計上され、その内訳は、建築工事費1,190円、設計監督費40円、雑費20円である。工事費では、敷地工事と製材をしたようである。8年度の歳出予算は、建築費1,100円が計上され、その内訳は、建築工事費1,000円、設計監督費50円、雑費50円である。「工事報告」によると、総工費は2,718円で、その内1,000円が地元からの寄付であった(予算書と工事報告の金額は合致しない)。場所の選定については、通学区の中央であり、学校の周辺にふさわしくない建物が無く道徳上問題がないこと、校地も通学路も南向き(日当たりが良い)で、通学上も衛生上も良いとしている。飲料水については、校地の東南方の山腹に良水の湧水があり、水量も多く、飲用としても防火上も申し分ないとしている。建物の設計図、設計仕様書は7年6月15日付けで収められている。作成者は中嶋工務所と書かれている。

4 配置と建築の特徴

(1)敷地と建築の構え



「入山分教場校地校舎仮想平面図」(配置平面図)

『學校建築関係綴』より転載

上図は、昭和7年(1932)当時の計画段階の配置図である。現地で敷地の境界がはっきりしなかったため、この図面通りに配置されているかは確認ができなかったが、もう少し敷地の南北に幅があるように感じられた。旧野麦街道から山道の通学通路を登ってくると、敷地の西南の隅にたどり着く。そこには装飾タイルをあしらったコンクリート製の門柱が2本あり、小さな運動場を左手にみて、その奥に校舎が配置されている。南側は登り斜面となっていて、敷地造成時に人力で積んだという石垣が残る。校舎は南面に入口があり、校舎と直交する向きで宿直室が東奥に配置されている。宿直室の南にある便所棟は、農山村体験学習施設として活用する際に増築整備されたもので、その横に山の湧水を引いてきたコンクリート製の貯水槽がある。東側は建物から数メートルで下り斜面となっていて、建物敷地としては機能していない。敷地の北側は建物脇に1 m程度の通路があり、その外側も下り斜面となっている。西側の運動場では地域の人を交えて球技などをする事もあり、球が転がって行ってしまわないように斜面の手前にネットを張っていた時期もあったという。また、校舎の西面は運動場に面していたので、窓には球避けにフレームを組み粗目の亀甲金網を張ってある。



装飾タイルが貼られた洗い出し仕上げの門柱。

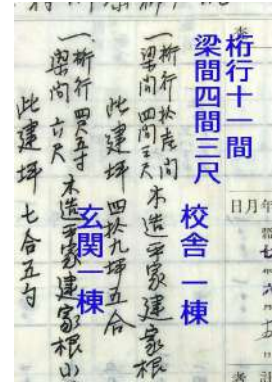


校舎西面の防球ネット



山から引いた水を貯めた水槽

分教場の間取りは、玄関ポーチのある入口を入ると、36畳の広さの体操場で、右手は間口一面引戸で間仕切られた28畳の広さの教室と、その北側に便所棟へ続く廊下がある。左手には18畳の広さの裁縫室と、その北側に9畳の広さの職員室がある。体操場は講堂としても使われた。以上が設計仕様書では「桁行十一間梁間四間三尺」の規模の「学校部分」として扱われている。他に付属屋として、玄関(ポーチ)、宿直室(教員宿舎)棟と便所棟、渡廊下棟、湯呑所棟が書かれているが、用途ごとに分けて計上したもので、実際に建物は1棟として計画された。学校部分の廊下の突き当たりの先に便所棟があり、渡廊下(吹き曝しでない)を通り、6畳の広さの湯呑所を經由して6畳2間の宿直室に繋がっている。湯呑所は設計図より1坪半(宿直室の押入0.5坪含む)増築され、流し台とガスコンロ(LPG)が設置されている。



仕様書※別添資料参照

宿直室の南側に3尺幅の通路を挟んで、後利用のために増築された便所棟は、西側に大便器ブースが2つと、小便器を備えた便所、東側に吹き曝しの作業空間があり、北側に幅の広い流し台がある。

(2)建築の仕様と特徴

①外部

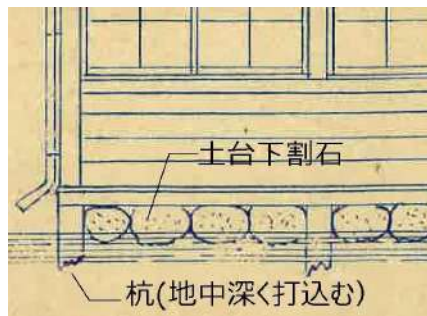
分校の屋根は、昭和31年(1956)に葺き替えられ現状では鉄板一文字葺きであるが、当初の設計仕様書では小板葺きとなっている。外壁も下見板張りで、木材の豊富な地域性が窺われる。外壁は西洋下見板張りクレオソート塗り、玄関のポーチ柱は特別に樺材を指定している。玄関周りは意匠にこだわりが見られ、大屋根の鉄板葺きは平葺きであるのに対し、ポーチの屋根は洒落た菱葺き(改修時)となっている。また、破風板の端部がアールに加工されていたり、妻壁部分の板壁が、古くからハレを意味する縁起ものである旭日旗のように張られている。入口上の小壁は、洋風建築に多く見られる四方を金鋺押さえて縁取ったスタッコ仕上げになっている。入口の引戸は旧制松本高等学校にも見られるような唐戸で、水色のペイントが残っていた。



玄関ポーチ

大正10年(1921)に奈川電灯株式会社が設立されており、学校にも電気が引かれていたと思われるが、1部屋に1灯の白熱球では明るさが十分でなく、明るさを補うためにどの部屋も大きなガラス窓

がはめられた。窓も玄関同様水色のペイントがなされていた。窓は南面と西面は木製の水切が付く。柱がある部分の土台下にコンクリート製の礎石(束基礎)があり、他の土台下は空いている。設計仕様書



立面図の基礎周り(設計図に加筆)



ポーチ屋根



現況の基礎周り

では割石が敷かれることになっていた。長年空き家状態であった割に床が腐っていなかったのは、束基礎のみで床下の通気が良かったからかもしれない。なお、元の設計図面では、柱の下の土台は杭基礎に載せてある。杭打ちを止めたのか、束基礎の下に杭を施工する方式にしたのか、不明である。外壁は大壁下見板張りで出隅は付け柱で納められ、下部は木製水切りと付け土台が付く。外壁の内部は、内側が漆喰塗りになっている部分のみ下地の土壁があり、内部が腰板張りになっている部分は空洞である。窓ガラスはパテ押さえではなく、内側の棧で留め付けられている。元はパテ押さえであった可能性はあるが、現状では残っていない。

便所棟の仕様は校舎部分に準ずる。元設計図には壁の下に汲み取り用の慳貪(けんどん)式の扉が描かれているが、便槽を建物より外にはみ出させ、外から汲み取る方式に変更されたようである。渡廊下棟は、当初設計では腰壁だった



立面図の便槽周り



現況の便槽周り

のが掃き出しの建具に変更されていて、現状ではその部分は崩壊していた。便所棟と湯呑所棟の屋根からの雨水が集中したせいと推測される。湯呑所棟と宿直室棟の仕様も校舎部分に準ずるが、宿直室の西面の壁は土塗り壁に漆喰仕上げである。一部窓ガラスは昭和40年代製造の型板ガラス「銀河」になっている。



型板ガラス「銀河」

増築された便所棟は、コンクリートの布基礎が回され、屋根は長尺鉄板横葺きである。外壁は下見板張り(鎧張り)であるが、出隅役物は使っていない。便所は汲み取り式で便槽、臭突(便槽から排気して便所内に臭気が廻らないようにするもの)がある。



土塗り壁の裏面

②内部

分校の教室棟の床は板張り(設計仕様書には柁(ツガ)板又は縦(ヒ)板とある)、壁は漆喰塗りに、腰壁は縦板張り(設計仕様書には縦板とある)で、共に柱を見せた真壁納め、天井は棹縁天井である。壁の漆喰塗りの下地は土塗り壁で、外壁が剥がれた部分からの目視及び設計仕様書によると、貫に鬼葎(葎(ヨ)の硬い部分のことか)を釘止めし、普通の葎を束ねたものを使い小舞を搔いてある。竹が少ない中信や北信に多く見られるが、鬼葎ではなく山棒(ツガ:木の枝)を使うことが多い。設計仕様書では大津壁仕上げ(石灰と粘性の高い土とスサが材料で、土の色が出る)としているが、現況は漆喰塗りにある。壁が白い方が窓からの光の反射率が高くなり室内が明るくなるので、変更したか改修した可能性がある。壁の一部は白い化粧ベニヤが張られているが、表面が劣化して剥がれてきたことへの対処かと推察する。



体操場の欄間の「何か」



教室の小物掛け

体操場の南面の窓の欄間部分には、木製の格子のような物を手前に傾けた状態で取り付けられているが、用途は不明である。2教室には各2面に黒板があり、後付けで壁

際に小さな棚が造り付けられている。腰壁の上部見切材に小物掛け用の釘が打たれ、数字のペイントがされていた(裁縫室は最後の児童のものと思われる名札が貼り付けられていた)。電気は碍子配線で、各室1灯の白熱球照明器具(教室はソケットにひねり式のスイッチが付いたもの)があった他、後でつけ足したかと思わ



ベル装置



ストーブ

れる照明器具が支線などを使って吊り下げられていた。職員室の入口上部に、チャイム代わりのベルが取り付けられていた。暖房はストーブだった。体操場の北側と2教室の南側の壁に煙突を通した眼鏡石の跡があるが内側から塞いであり、2教室は欄間の窓ガラスを外して煙突を出し直している(天井に近すぎたか?)。西側の教室は眼鏡石跡が2か所ある。元在校生によれば、ストーブの焚付用の枝を拾いながら通学したということである。出入り口は、職員室がガラスが入った腰高引違い戸で、他は唐戸である。東側の教室は、唐戸を外すことで体操場と一体空間として使うことを想定して造られている。この教室には古いオルガンが置かれていた。

便所棟は、教室棟の廊下の引違い板戸の外に1段下がった3尺幅の通路があり、ガラス戸で仕切られた3尺幅の土間を挟んで小便器が1つと、大便器の個室が2つ並んでいる。土間を介しているのは、外からの使用も考慮したものと思われる。個室の外には通路から土間に降りずに入るための小さな式台が付いている。



便所前の手洗い



手書きのポスター

便所内は腰高の腰板張りで、上部は漆喰塗りの壁、床は板である。便器は陶器製で、手洗いは無く、土間の奥に足つき台に乗せた洗面器があり、その上に吊り下げ式の手洗い水タンクがある(現状は洗面器の上に置かれている)。横のガラス戸に「トイレから出たら手をあらう」と書かれた児童が書いたポスターが残っている。通路(渡り廊下)の先にある片引き戸の先はコンクリート土間床の湯呑室で、床の中程に炉が切られている。



湯呑所の床に残る炉



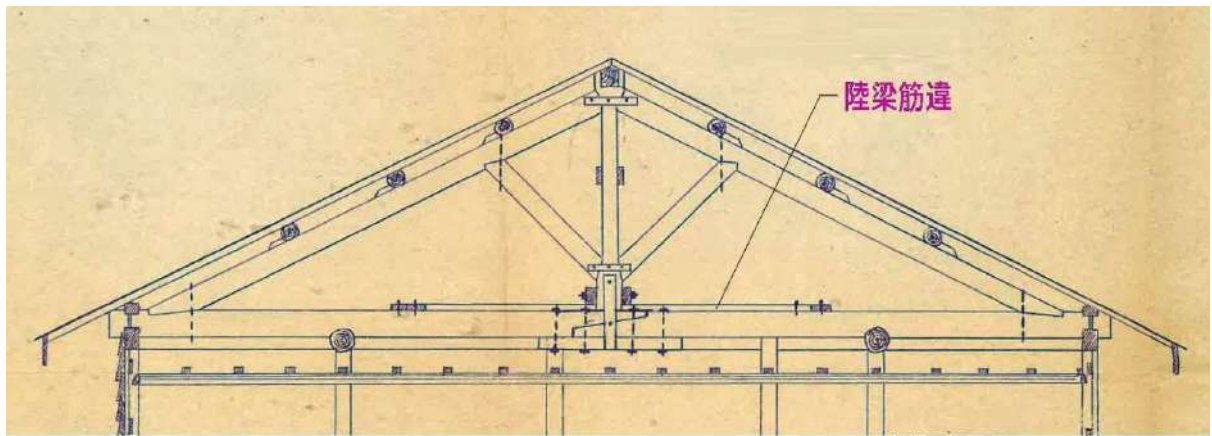
宿直室障子の小紋ガラス

明治期は体操場に、登校してきた子供たちが温まるための炉が切ってあったが、時代が下ると炉は宿直室などに設けられるようになったという。赤いドラム缶は万が一のための防火用水に使われたものか。宿直室の東面は縁側になっていて、全面掃き出しのガラス窓である。縁側とは小紋ガラスが入った障子戸を挟んで6畳二間の和室がある。吊り下げ電球ソケットの簡素な照明器具がついている。

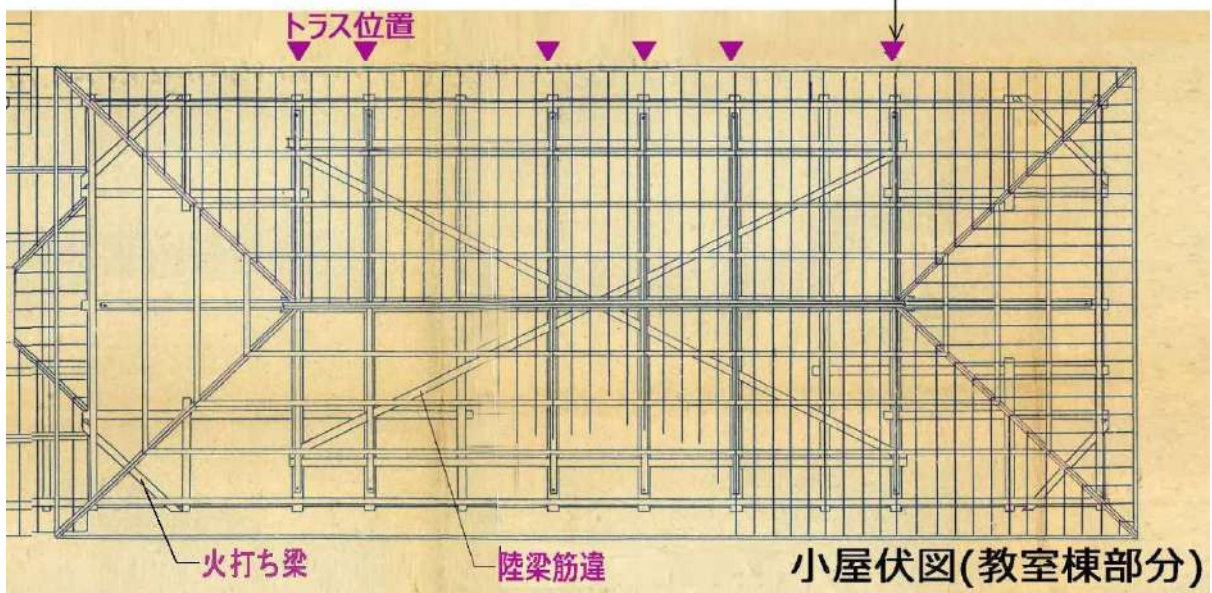
③構造

小屋組みは、寄棟頂点の両端と間仕切り壁のない部分に1間の間隔でキングポストトラスが掛けられている。宿直室棟は寄棟頂点と、残りを2等分した位置にトラスが掛けられている。設計仕様書には、主要な材料である木材の次に各種ボルト(ボルト)類、短冊や鋸(カスカイ)などの補強金物の計上がある。教室棟には四隅にのみ火打ち梁が入っている。基礎は回しておらず、教室棟は栗材の木杭を34

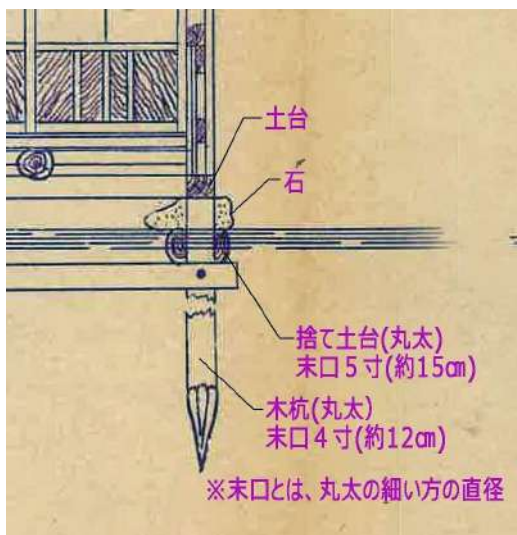
本、宿泊室棟と便所棟は松材の木杭を各6本(設計仕様書による)を打込んでいる。杭打ちの位置はおそらく外壁線と体操場の間仕切り線下と考えられる。栗は不朽に強く、松も栗には劣るが杭に良く使われる材である。壁は貫構造で、筋違は入っていない(設計仕様書による)。



この断面図



教室棟の小屋伏図と矩形図の小屋組み



左図は教室棟の断面の基礎部分である。木杭の頭に土台を載せてあり、土台下の、木杭の間に石を並べて置いている。石の下に捨て土台があるが、これは丸太を2ッ割にして杭を挟みボルトで締めることで、並べて打った杭の通りを揃えるためのものである。設計仕様書の摘要欄に、「直木皮削リモノニッ割ト致シ杭木ヲ挟ミボールド締メトス」と書かれている。現在の杭打ち工法では、杭の上に連続のコンクリート基礎(地中梁)を設ける。入山分校の現況は土台の下に礎石がある。この時代には非常に高価であったコンクリートで地中梁を施工した可能性は低く、杭頭に直接束基礎を載せたか杭を取り止めたと思われる。

(3)類例建築

類例建築物として、山間地の分校、同時期建築の小学校を記載する。

①安曇村 大野川小学校 沢渡分校 ◆山間分校



『写真で見るこころの松本』より転載
昭和23年(1948)開設・建築 同39年(1964)焼失

- ・下見板張りの外壁と寄棟造り小板葺きの屋根、東石基礎が入山分校との共通点である。

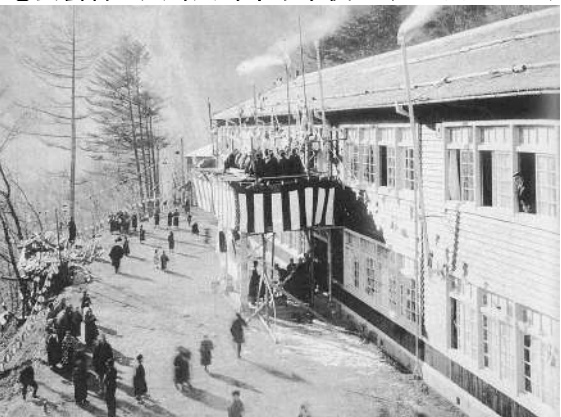
②入山辺村 入山辺小学校 中入分校 ◆山間分校



『写真で見るこころの松本』より転載
昭和22年(1947)開設 同42年(1967)廃止

- ・外壁は下見板張り、屋根は瓦のようである。さほど遠くない里山辺に、いくつも瓦焼工場があり、瓦が使いやすかったと思われる。

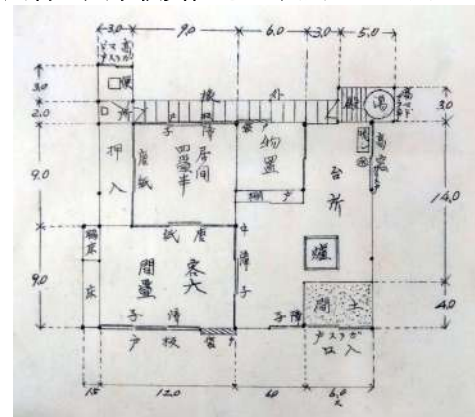
③安曇村 大野川尋常小学校 ◆同年代の建築



『写真で見るこころの松本』より転載
昭和6年(1931)築 同31年(1956)移転

- ・板張りの外壁と寄棟造り小板葺きの屋根は共通するが、規模が大きく、基礎はコンクリートの布基礎である。
- ・188坪で建築費は13,330円であった。

④奈川村 久手教員住宅 ◆宿直室の類例



『学校建築関係綴』(松本市文書館蔵)より転載
昭和8年築

- ・台所が土間で、炉が切つてあるのが入山分校の宿直室(教員宿舎)の湯呑所と共通する。入山分校の湯呑所は、宿直の台所を兼ねていたと考えられる。

◇廃校校舎の活用事例

- ・高根村立高根小学校野麦分校 ◆山間分校
昭和28年(1953)建築 木造2階建て

地元有志からなる「野麦学舎保存会」により、令和5年(2023)に地域コミュニティの場の「劇場」として再生された。
<https://nomugi.themedia.jp/>

- ・木曾町立上田小学校 ◆山間学校
昭和27年(1952)建築 木造2階建て

竹中工務店が関わる共同出資会社などによって設立された合板製造会社・ツミカサネが、内装材工場、事務室、資材倉庫などに改修、令和8年(2026)秋ころに本格稼働する。

5 人物・学校の思い出

(1) 教員 高宮萬蔵

旧野麦街道から分校への上り口の脇にある廃屋は、入山分校の教員を長く勤めた高宮萬蔵の住居であった。高宮は明治11年(1878)4月6日、入山の生まれで、昭和47年(1972)5月29日に没している。明治31年(1898)に奈川村小学校松竹分教場仮教室の代用教員(無資格の教員)となり、同37年(1904)に本科訓導(正式な教諭)として寄合渡分教場に勤務、大正5年(1916)に入山分教場勤務となった。昭和7年(1932)



旧 高宮萬蔵宅

3月に退職(当時の定年は55才)、代用教員として入山分教場に努めた後、6月に奈川尋常高等小学校訓導に復帰した。昭和26年(1951)に奈川村より、翌年には長野県教育委員会より、教育功労者として表彰された。教職にあった53年間のうちの41年間を入山分教場で教えた。「長年教えていると、地域の人々が皆教え子になって家族の一員のように思え、この地を自分が守らねばという気持ちになる」「新分教場が完成し、学校というものが本当に出来上がった、と感じた」と語っている。

(2) 入山分教場建築時寄付者(竣工式招待者)

□寄付者(分教場竣工式招待者)

忠地谷蔵、高宮清、中谷初雄、上條折太郎、前田金定、川越孝市、桐(相?)沢とく
上記の内、史料を見つけられた人物について記す。

○忠地谷蔵

右：校地入口の門柱



分校入口の門柱裏面に「寄付人 忠地谷蔵」と刻まれている。『学校建築関係綴』(松本市文書館蔵)の分教場竣工式の招待者芳名録には、寄付人、元村会議員として記載がある。村の入山御頭御番所の家柄であるという。明治7年(1874)3月、忠地柳左衛門の長男として生まれた。柳左衛門は、嘉永6年(1853)から明治5年(1872)に寺子屋(私塾)を開いていた人物である。谷蔵は大正8年(1919)より土木請負業を営んでいる。大正6年(1917)から2期に渡り村会議員を、翌年からは学校委員をしばらく務め、村内の学事に貢献した。他にも、村恩賜林委員、衛生組合長、木炭組合評議員などを務めた。

○中谷初雄

「山のひだや」創業者。明治35年(1902)から松本駅前(新伊勢町)のひだや旅館を営んでいたが、登山案内所という看板を掲げていて、山との繋がりもあったことから、昭和28年(1953)上高地に移転し旅荘「山のひだや」として山小屋営業を開始した。上高地を人一倍愛する山の男、と紹介する本がある。

○上條折太郎と前田金定は、京浜電力の関係者として名前がある。

上條折太郎：京浜電力配給関係の欄に記載(上條折太郎六名)がある。(昭和16年資料)

前田金定：京浜電力株式会社の、大正12年(1923)入社社員として記載あり(大正15年資料)

※京浜電力(元社名は梓川水電)は、大正中期頃よりダム建設に関し村へ申入れをしている。大正12年(1923)、梓川に発電所と横浜近郊に変電所、それをつなぐ200Kmの送電線を完成させて開業した。

(3)元在校生からの聞き取り他

◇ 昭和46年卒業生(44年まで分校に通学) より聞き取り

- ・ 入山は、林業と、炭焼き、養蚕をやっている人が多かった。今はすっかり木が茂っているが、山の斜面の上の方まで桑、豆などの畑が広がっていた。上の方は蕎麦が多かった。
- ・ 昭和30年代頃から、外に働きに出る人が多くなった。
- ・ 自分が通っていたころは低学年が5~6人、高学年が8~9人ほどだったと思う。
- ・ ダムの工事をしていたころは、東電や間組の社員の子供も通っていた。名字ですぐわかった。
- ・ 公会堂は昭和40年代前半に建築された。そのころには簡易水道がひかれていた。入口前に浴室棟と便所棟があり、ダムの工事で危険区域になった家の住人(2家族)が公会堂と宿直室に仮住まいしていた。
- ・ 廃校後、地区の集まりなどに使われていた。

昭和53年頃、体験宿泊施設として整備(便所棟の増築・湯呑室の増築と設備改修など)をし活用、平成前期くらいまで使われたようである。周辺の空き家3棟(旅籠松田屋含む)も使われた。うち1軒、松田屋の西隣「つたや」は、個人で継続営業をしていた。

※関連新聞記事と年が異なる

- ・ 廃校後も数年前まで地域の有志で、軒先の補修や草刈りなどの保全活動を行っていた。
- ・ 廃校後、壁の中にハチが巣をつくり、それを捕食するために熊が板を剥がした。
- ・ 祭の時など、講堂の北側に白い布を吊ってスクリーンにして映画鑑賞をした。

- ・ 年に1回、親も参加しての大掃除を行った。廊下にかけてある長柄箒で天井のすす払いなどをした。普段の掃除



廊下の長柄箒

では床の雑巾がけをしていた。

- ・ 冬は教室の真ん中あたりにダルマストーブが置かれた。燃料は石炭で、便所棟がある辺りにあった倉庫に保管されていた。登校時に焚付の杉の葉や小枝を拾ってくるようになっていた。
- ・ 便所は汲み取りで、汲み取ったものは地区内で活用されていたようだ。
- ・ 校舎東側の便所は水道がひかれておらず、汲み置き型の吊り下げ型の手洗い器があった。
- ・ 貯水槽には蓋があった。綺麗な水で、生水のまま飲料用としても使っていた。
- ・ 昇降口の脇か、入ったすぐ横辺りに下駄箱があったと思う。建物内は上履きで過ごした。
- ・ 教室の南側の窓だけ、白い無地の生地のカーテンがついていた。

1990年(平成2年)2月15日

第三社会

奈川村の廃屋、第二のつとめ

都会の人たちに貸し出すため、全面改修した奈川村入山の民家

体験の場

改修したのは、明治から大正時代に建てられた木造二階建ての二棟。うち、一現、開墾もあり、かつて軒先茶店だったとい、延の山村生活を体験できる。二百七十平方メートルの広さがよつした。費用は付添がある。自炊、ふえ、トイレなどを新しくする。二、天井板を新しくする。二、天井

都会の人の利用歓迎

奈川地区は奈川破ダムを見下ろす旧野原街並いにある約二十戸の集落。過疎化が進み、荒れるに任せている廃屋がほかに十数戸点在している。このため、村は新年度、さつ民家二棟を廃校になつている分校を改修し、子供たちの体験学習の場としての活用を計画している。

地元住民でつくれた管理組合が運営。四月末の連休ころから利用できるようにする。料金などはこれから決める。各棟とも一度に十一、十五人が宿泊できるため、家族や会社の仲間などの利用を想定している。

街灯設置費を含め千八十万円で、半分は県の補助金。

信濃毎日新聞平成2年(1990)2月15日記事

- ・ 柱と窓枠部分は薄水色にペイントされていた。
- ・ 校庭側の窓の外側についている木枠と網は、防球ネットである。講堂の南面の欄間窓の内側に斜めに付けられた格子は何のためにつけられていたか分からない。
- ・ 授業の時間はチャイムなどは無く担任の先生が時間を管理していた。行事等や特別な場合は講堂の職員室入口脇につけられたベルを鳴らしていた。
- ・ 校舎の北側にブランコが、北側には鉄棒があった。
- ・ 入口の門柱は忠地谷蔵氏の寄贈である。
- ・ 北側の石垣は学校建設のときに人力で積んだもの。それまでは畑地(斜面)だった。
- ・ 道路からの上り口脇の廃屋は、分校に長く勤めた高宮萬蔵先生の住宅である。
- ・ 昇降口前で入学式の時など記念撮影をした。
- ・ 先生は二人いた。
- ・ 年に数回、本校から校長先生が来て、講堂で入学式や期末などの行事を行った。
- ・ 分校で行事は独自でやっていたが、運動会や音楽会は本校に行って本校児童と一緒にいった。
- ・ 本校の児童が遠足行事で来て、自分たちが授業を受けているときに校庭や遊具で遊んでいるのを見て、子供ながらに領分を侵略されている気分になった。
- ・ 複式学級で1～3, 4～6年に別れて授業を受けた。先生は2人で、各教室を1人で受け持ち、一人ずつ順番に教えながら課題を与え順繰りに廻ってくるので、受ける側は先生が次に回ってくるまでに答えを出さねばならなかったので必死で真剣に授業を受けていた。
- ・ 給食は無く、弁当持参だった。
- ・ 宿直室は先生のうちの1人が暮らす教員宿舎だった。
- ・ 校庭は地区の運動会や祭りなどでも使われた。



分校での地域行事の様子※プラカードの「ノートルダムの背むし男」(映画公開1957)から、昭和32年頃の撮影か

- ・ 校庭では地区の大人、卒業生も交えてソフトボールなどもやった。南側にはネットを張ってあったが飛び越えたり隙間から転がったボールを何度も下まで拾いに行った。
- ・ 冬は大人が雪掻きをしてくれた。スキーやソリを持って登校し、帰りは滑って帰った。水を撒いてツルツルにして怒られた思い出がある。

※松本市史民俗編によると、明治期の校舎は体操場に大きな炉が切っており、冬は登校してきた子供たちが暖をとったという。大正以後の建築では、炉は公仕室などに設けられ、朝は炭が熾って部屋中暖かかく、ダルマストーブの薪への着火に炉から取り出した炭を使っていたとある。(P11補足)

入山分校回顧座談会

出席者氏名 忠地亀一 忠地増太郎 忠地正三 百瀬竜太郎 忠地

勘市 忠地安男 忠地健一 忠地より江 竹内靖

竹内 その当時の学習状況や服装について、年配順にお話下さい。

亀一 わしらの時代は、私の方の学校は、村で認められない学校であって、松竹分校まで行かんならん。それが一里ばかり歩かなければならんために、冬なんか行くことができません。それがため入山では元資無尽と言うものを始めて、そう言う元資無尽でみんな金を持って出し、無尽をとった者は区へおさめて給料を支払ったものであります。お宮のそばの百瀬次郎と言う、空家の八畳と六畳の部屋を借りて授業を始めました。それが、明治二十八年から三十一年までやっていました。その時、私はそこで一年、私の姉は三年おそわりました。その時代は子守学校でみんな子を背負って自分の弟や妹をしょって行ったものであります。先生は非常に骨を折ったのですが、私達は読み書きソロバンを主として習いました。子供はみんなポロソを着て、雪ばかまをはいて子を背負って勉強し、子が泣けば、「外へ出てだまして来い。」と言われるやからでありました。その時の先生は、高宮民弥氏で、三、四年までの授業で人数は十二、三人位でした。

増太郎 わしが学校へ行った頃は、今の勘一さんの家が学校であった時で先生は高宮民弥氏だった。二階が職員室と宿直室になっておったな。下が教室で子守をやりながら行ってた者もいた。黒板が三間で長さが三間半あった。それに古くて小さいオルガンが一台あったと記憶している。冬は今のストープのようなものがなくて、随分寒い思いをしたものだ。

正三 私は大正十年に入学しました。昔のことで、わらぞうりやごんぞうをはいて、かすりの着物にちゃんちゃんを着て、モンペをはいて通学したものです。雨降りにはぼろやむしろをかぶって学校へ通いました。先生は高宮万蔵氏で一年から六年まで一人で担任して

いました。今と大変違っていることは、わらぞうりは家で作ってもらうより仕方がなく、みんな不自由しながら、学校へ出ていました。今考えてみると、学校は第二で、家の両親は、家の手伝いを第一と考えていたようです。教科は習字、国語、算数で上級生になってから修身が加わり、五、六年で歴史、メートル法などちょっと習いました。

竜太郎 私の小学校へ入学したのが大正十二年ですが学校は正三さんと同じところでした。今考えてみて一番記憶に残っていることは小学校三年の時なんです。関東大震災がありました。その時の高宮万蔵先生は沈着で、その時の指導は非常に適切でありました。私共はあわてる、先生は「あわててはいけん。秩序みださんように庭へ出る。」とこう言うぐあいに指示されて、庭へ出たのです。あの時の地震は大きくて家はぐらぐらゆすれ、相当なものでした。それから四、五年の時、万蔵先生が中耳炎をわずらって、約一年間病氣しました。その時、今の村の公民館長の古幡先生、その時は、根津先生と言っていました。約一カ年こちらへ来て教えてくれました。その時も一年から六年まで先生が受持ってくれましたが先生は容易なものではない。それで一日先生から、二、三時間おそわる、その後は一、二年生から三年生に教えるというようなことをしました。当時の筆記用具は石板に石筆を使いましたが、高学年ではノートを使いました。

勘市 私は大正十四年入学しました。一、二年頃の記憶はありませんが三年生の時、先刻百瀬さんから話がありました。当時の根津先生が黒川渡から一カ年、通って教えていただきました。今だに忘れないのは古幡先生に来ていたで、新しい教育を教えていたのだと思います。と申しますのは、当時、私は三年生で、重さの掛算が全然判らなかつたんですが先生に、「重さの掛算はこうするものだ。」と教えてもらいました。それだけが今だにはっきりしています。当時、先生は十九才か二十才だったと思いますが片道八軒の道を通って教えていたで、現在でも先生に会う度に、「あの当時は大変だったですね。」と申し上げているんです。当時は、今と異

って歩くことを左程感じなかったために、八軒の道を歩いて往復し
 教えてくれたことは今だに感謝の念に堪えない次第です。

安男 私は今までお話のあった先輩方の学校に三年までいまして、
 新校舎が昭和八年七月に完成してそこへ移りました。非常にうれし
 くて、なんだか落ちつかない気持ちでした。その時はまだ高宮先生
 が一人で授業を受持ってくれていましたが、かなり年配でした。児
 童は一年から六年まで三十人程おりました。なにしろ、下の方を教
 えておれば上の方が騒ぎ、上の方を教えておれば下の方が騒ぐと言
 ったぐあいでは本を読んでいるのか、何を読んでいるのか判らん位で
 した。歌は一年から六年まで同じ歌詞でやさしいものを二、三やり
 ました。学習は当時の不景気のせいかなノートとか紙など豊富に買っ
 てもらえないので習字の時、練習は新聞紙を先生から分けてもらい、
 清書は一枚だけでした。鉛筆なども一本しかなくて短くなるまで絶
 対買ってもらえないので大切に使いました。それで十分勉強できな
 かったような気がします。

より江 私の入学したのは二十五年でした。人数は六年生まで二十
 五人でした。一、二年の時はよく覚えていませんが先生は二人でし
 た。授業は三学年一緒だから、先生が一学年を見ている時は他方は
 与えられた事をやっています。教科書を進んでいきました。音楽
 は一組一緒の時もあり又、全員一緒の時もありました。入学した時
 は先生は高宮万蔵氏でしたが三年になった時先生は退職されて、山
 田純一先生が代わりに来られました。

竹内 次に学校行事のようすをお話ください。
 亀一 行事というものはありませんでした。

正三 その時代の行事の遠足は山へ遊びに行くぐらいのことで、二
 年生の時、稲核へ遠足に行ったのが一番遠くまででした。疲れて運
 送と言った馬車にのせてもらって帰りました。運動会はもんぺやぞ
 うりをはいてとびました。

竜太郎 その当時の分校には庭がありませんでしたので、今の高宮
 剛君の家の前の道から万蔵先生の家の前まで、とびっくらの練習を

しました。毎日の運動にしても道路を利用しました。その当時は松
 竹に分校があったので、そこへ行って運動会の練習をやり、秋の運
 動会は本校へ行ってやりました。

勤市 行事で一番記憶に残っているのは三年生の時、遠足でかんば
 峰へ行くことになって、父にお願いしてわらじを作ってもらい、黒
 川渡まで歩いて行って、古幡先生の下宿していたふく屋へよつたら
 先生に非常に歓待してもらい、かんば峰へ行きました。秋の運動会
 の練習には松竹分校まで高宮先生に連れられて行き、そこで今の公
 民館長の奥さんに全校遊戯を教えてくださいいただきました。学年別のはで
 きませんでした。入山分校には校庭がなかったので、私達の松竹ま
 で行く楽しみは回転ぶらんこにぶらさがることでした。当時、修学
 旅行に直江津へ行くことになっていましたが、私の上に姉がいたの
 でやってもらえませんでした。その時は、つくづく姉弟のないこと
 をうらやましく思いました。今考えてみると、支度は別で当時の金
 で五円今の金でも相当の金だったんです。今親になってみて、当時
 の生活を考えてみて姉がいくのが順序だったなあと思います。

安男 遠足はこの付近のうすの原の国有林とか見はらしのよい所へ
 行っています。修学旅行の費用は一人三円でやっと出してもらって
 当時、村に何台もなかった自家用車に分乗させてもらい松本駅へ行
 き汽車に乗りましたが、初めて村外へ出たということで非常に楽し
 いものでした。

より江 こまかいことは覚えていませんが山田先生になってからは
 本校へ行って一緒にやるのが多くなり、運動会、学芸会、音楽会
 身体検査等本校でやりました。

回想の入山

山田 純 一 昭和三十一年入山分校教諭

思い出多い入山六カ年の生活こそ実に楽しかった。当時はまだ現在の安曇ダムの建設など夢にも噂されていない頃で、遠く西に煙はく焼岳を望み、遙か下に奈川の清流を眺め、この流域に沿うよう、山の中腹、旧飛騨街道に三々五々散集した家並約三十戸そこそこの入山の部落であった。しかも時の古老の言では、その昔甲斐の武田氏の落人がこの地に住みついたのが創りとやら。兎に角開けゆく文化の世界からは隔離された別世界の如く、僅かに山の中腹斜面を拓いた狭い耕地や、山仕事、炭焼き等をその頃生活の中心とし、ただ特別の人が下の奈川渡にある東電発電所の仕事に朝夕通勤するほか、あとは何かお祭りその他の慶弔行事以外、殆ど他の村落との交渉した往来も数えるほどであった。こうした理由からか自らここ入山の村人の醇朴さ、心の美しさは四囲の自然美と相まって当然のことのようにも思われ、特に春秋山の往来にあの美しい小鳥の囀りを耳にしつつ、勝れたる景観の眺めこそ

『山ふところの桜花 独り匂える朝日影

見る人なし今日も暮れ明日や散りなん黄昏に』

の歌唱そのままのよう、全く別天地の感深きものがあつた。

抑々ここ入山の分校は昭和五年四月に設置され、以来この部落出身の高宮万蔵先生によって、殆ど同氏の昭和二十六年三月退職されるまで、長年本同一村内に勤務、そのためにその功績によって県より表彰の榮譽にあずかったほどである。然しその後のこと『この村の子どもたちには心の広い大きな教育をして下さい。日本はここだけではないと愛しあうように。』とは自分が着任早々、区の長老宅に初めて挨拶にいった際、丁度そこに同席された、誰方か知らない御仁の言葉であつた。これは正に先に述べた、ここ入山の人々の醇朴な長所に対して、孤立的な環境村落人としての、時には社交性に欠け、他処者、新入者に対する奇異、警戒の眼をもつてするといった短所を子供を通じての、あるいは正直な一言であつたかも知れない。尚こうした見方は単にここ入山分校児童に限らず、こうした村落、部落に育つた、一般分校児童の通弊で、殊に物ごとを批判するに『質より量をもつてする』傾向にあり、何ごとによらず、多人数集団の本校児童に対して、常に気おくれ、劣等感を自認している様相が見られることであつた。さればこうした偏見に基づき何となく和を欠き、他方蔑視される態度を何らかの方法によって除去し、

その結果がまた自ら和の精神にもと考慮、その指導使命の達成に何とか努めんと心したのである。ここに於てその指導の方法として最初気づいたことは『量より質の向上』即ちこのためには児童に何らかの方法により実力をつけ、これにより児童の自信を深めることこそ第一主義と考へたのである。この点幸いのことにはこの児童そのものが別に知力で劣っている訳でなく、否却つてその清純さは於ては、時の経過とともにその指導の一つ一つが、恰も白紙に何物か描くが如く、昨日より今日と指導効果が認められて、所謂指導甲斐あり、心楽しかったことである。勿論当時における教材とか施設に欠けていることは地域が当然であつたが、この点学習指導の工夫研究によって補うべく専心努力した。尚このためには先ず児童の自発活動としての発表力とか表現力を強調する教科として、且つ児童自身興味を持ち、一方聞く人をして、その上達いかんによってはその心魂の琴線を揺り動かし影響する音楽こそと着眼したのである。かくて以来歌唱は勿論のこと、傍ら簡単なリズム楽器としてのカステネットやタンバリンの指導からシロホン、ハーモニカによる旋律指導など、先ず個々の練習から始めて、終に合奏指導と学年相応指導したる処、児童も順次興味づき、半年、一年と時の経過にしたがいその技倆も進み、果ては安曇、奈川の両村合同音楽会における発表演奏、続いて昭和三十年十二月三日には松本市教育会館における、松安筑小中六十余分校教育研究協議会の席上、わが入山分校一校のみ指名選ばれて音楽演奏の発表といった榮譽を勝ち得るほどに、向上進展の域にまで到達した次第である。

勿論以上は一例に過ぎないが、もうこの時点では他の教科においてもしかるべく、同時に従来の児童の僻地分校的劣等感もいつか姿を消し、その声価は単に奈川村入山分校児童そのもののみと限定せず、部落「入山」の存在まで改め見直されようになつていたのである。然しここまで学習指導の成績を上げ、初期の使命目的達成のためには、当分校内にあつては先任の丸山栄子先生に続いて後任の平林春先生と、ともに児童愛に徹し、懸命協力指導の賜物あつたでこそ、一年生から六年生まで音楽と限らず何ごととも全校一丸となつて学習生活を全うしたからであることも、忘れ得ぬ事実である。特にこれらの成果は単に分校児童の父兄のみならず、遂には部落を挙げて全体が学校教育に関して熱心協力下さるようになり、何かと分校中心に一体となり支援し活躍、また時の平林常雄校長先生並びに前田教頭始め諸先生、また奈川村々当局等の厚き御理解協力あつたでこそと、當時を偲び今なお感謝の極である。

6 隣接 入山公会堂

(登記無し、築年及び所有者不詳)

※公会堂については、資料を見つけることができず、現地調査と忠地愛男氏からの聞き取りによる。

昭和40年頃の建築という。建てられた経緯、敷地の範囲などは定かではない。

公会堂は、分校の北側の斜面を少し下った場所にある。傾斜地にある敷地は、建物が載る範囲の全ては造成されていないため、建物の南側(山側)は土台まで埋もれ、北側(谷側)は木杭を打ち込んで土台を受け、床下を浮かせている。入口は西面にあり、近くに便所と浴室の跡が残っていた。浴室は、ダム工事の影響で居住地の地盤が危険になった家族が、仮住まいするときに使ったものだという。



山側は基礎が埋もれている

谷側は土台が浮いている(一部持出し)

浴室棟跡

公会堂の屋根は、鉄板瓦葺きであるが、両端部の列は鉄板が横葺きとなっている。梁間より外に瓦棒を施工していないため、葺き幅に材料幅が足りなかったことなどが考えられるが、なぜこの部分に瓦棒を施工しなかったのか不明である。外壁は押縁下見板張りで、塗装は窓も含め防腐塗料(色付け目的でない)のみと思われる。質素な造りである。入口は引違いの木製ガラス戸で、昭和40年代の型板ガラス「ほなみ」が使われている。



屋根(南西角)

内部は、玄関が風除室を兼ねており、正面に15畳、その奥にの12畳が続き間としてあり、一番奥に床の間と押入がある。玄関左手は四畳半に流し台部分が張り出して造られた台所となっている。和室は縁(へり)無し畳が同じ向きで敷き詰められ、壁、天井ともにラワンの薄ベニア張り仕上げで、継目は押縁で押さえてある。縁無し畳は、現在では高価だが、当時は縁付きよりも安価であった。玄関ホール



型板ガラス「ほなみ」

と台所は、板張りの床(幅が揃った規格品、既製品)に、壁と天井は和室と同じくベニア張りである。台所は南側の壁の上部が棚、下部は玄関側の下駄箱になっている。台所の北側にブリキを敷き込んだ流し台と作業台代わりの机が置いてある。流しには2本の給水管が引



台所の棚



玄関の下駄箱

かれているが、恐らく貯水槽から引いたものと簡易水道であると推察する。建具は、押入の襖以外は化粧ベニアを使った木製(玄関と和室境はガラス入り)で、全体的に質素な仕様で、ベニアが多用され

ているのが特徴である。年数を経てベニヤの積層が剥がれ、所々垂れ下がった状態であった。

北側は下り斜面地で土台下が大きく空いていて、この建物には連続した基礎は無い。土台を直接木杭に載せている。南側は埋もれていて確認できなかった。少なくとも谷側の外壁ラインの柱下に木杭を打ち、その上に土台を敷き、梁間方



集会所の木杭(西北隅)



集会所の床下 床組み

向の土台(間仕切り下のみにある)を掛け(その土台の下に、見える範囲では杭がない)、土台に掛けた大引の下に所々、束か杭か不明であるが地中からの丸太材がみられた。台所の張り出し床部分は、持ち出した先の土台を方杖材で杭に持たせている。見えている谷側の杭は地盤が下がったのか不陸が激しく、斜めに傾いているものもあった。そのような状態であるので、内部は床が谷側に向かって下がって、その反動で浮いた側の床で押し上げられ他建具の縦框が折れているほどであった。小屋組みは見ることができなかったが、桁行方向の外壁に梁の先が出ていることと、梁間が大きいことから、トラス組みであると考えられる。壁には筋違が入っているが、火打ち梁は入っていないようである。



奥の12畳間。左手の間仕切りの建具は崩壊している。



外観：東側の妻壁は板が縦張り



軒桁の外に梁先が見えている



玄関部分の天井裏

7 まとめ

奈川村立奈川小学校入山分校は昭和8年(1933)に新築された。入山仮分教場が開設され、村立の分教場になり、入山で建築に至ったのは、江戸末期から寺子屋(私塾)が入山にあったことで、他の分校の学区であったにもかかわらず、**入山で学校を持ちたいという住人の強い意志が働いて実現したものである**。寺子屋の師匠、忠地柳左衛門の息子が門柱など寄付しており、彼の働きもあったものと推察する。

建物は、当時の学校建築によくみられる下見板張りであるが、当初は屋根も小板葺きで、板材が手に入りやすい**山間地らしい仕上げ**である。P7の工事報告では村で製材に従事したとあり、どの範囲までかは不明であるが、床材も規格品でない板が使用されているので、**地元の材である**と考えられる。

設計仕様書に外壁の下見板張り板について、材料の加工から張り方まで図付きで指示している。板拵えは上を薄く(12mm)下を厚く(21mm)し、継目が外れないようにホゾ加工をして継目は縦に並ばないようにずらして張ること、窓額縁を板の断面に合わせて削って納めるようにとの内容である。見た目への気配りが感じられる内容である。山奥の学校とはいえ、**子どもたちの将来が輝くものであって欲しいという思いが、玄関周りの意匠や外壁、窓の納め方などから感じられる**。

分校という少人数での複式学級が子どもたちの連帯感を高め、さらに地域の絆を形成していたものと推察する。住人にとって、思い出のたくさん詰まった懐かしくもかけがえのないものであろう。入山に暮らす世帯数も減少する一方ではあるが、分校周辺、旅籠松田屋やその周辺の廃屋を使ったイベントが行なわれることもあると聞く。この地の特徴的な造りを持つ民家建築が後世に伝わればと思う。最後に、調査や史料収集にご協力いただいた方々へ心より感謝申し上げます。



仕様書の書き込みと窓枠の納め



昭和中期頃と思われる入山分校

『写真で見るところの松本』より転載

8 参考文献

※1：国会図書館デジタルライブラリーより

- ・『野麦峠ミュージアム』 <https://museum.furusatonagawa.com/>
- ・『ふるさと奈川観光交流部』 <https://vill.furusatonagawa.com/>
- ・『南安曇郡誌 第3巻下』 奈川村誌編纂委員会(編集・発行) 昭和46年(1971)
- ・『奈川村誌 歴史編』 奈川村誌編纂委員会(編集) 平成6年(1994)
- ・『奈川村誌 民俗編』 奈川村誌編纂委員会(編集) 平成8年(1996)
- ・『西筑摩郡誌』 長野県西筑摩郡役所(編集) 大正4年(1915)昭和48年(1973)復刻
- ・『奈川学校開校百年記念誌』 奈川村立奈川小中学校・奈川村教育委員会(編集・発行) 昭和49年(1974)
- ・『学校沿革誌』 奈川村立奈川小中学校・沿革誌編集委員会(編集・発行) 昭和46年(1971)
- ・『学校建築関係綴』 奈川村役場 松本市文書館蔵 大正15年度～昭和(年の表記無し) (1926～)
- ・『奈川村入山分教場建築設計仕様書』 松本市文書館蔵 昭和7年(1932)
- ・『写真で見るこころの松本』 小松芳郎(著)郷土出版社(出版) 平成26年(2014)
- ・『昭和六年学校臺帳』 松本市文書館蔵 昭和6年(1931)
- ・『工事報告』 忠地義光氏蔵 昭和8年(1933)
- ・『官報 1931年04月21日』 大蔵省印刷局(編) 昭和6年(1931) ※1
- ・『信毎年鑑 大正13年』 信濃毎日新聞社(出版) 大正13年(1924)
- ・『躍進長野県誌』 長野県誌編纂所(編集) 昭和14年(1939) ※1
- ・『産業技術史資料データベース』 <https://sts.kahaku.go.jp/sts/index.php>
- ・『松本平 市民タイムス 2025.6.3』 (令和7年)記事
- ・『信濃毎日新聞 1990.2.15』 (平成2年)記事
- ・『野麦学舎 パンフレット』 (令和7年度景観シンポジウム・フォーラムで配布されたもの)
- ・『こころの旅 東日本』 榊原幸一(著) 旅と湯と風(出版) 昭和62年(1987) ※1
- ・『京濱電力株式会社沿革誌』 京濱電力株式会社(編) 大正15年(1926) ※1
- ・『名古屋通信局管内電気事業要覧 第19回』 名古屋通信局(編) 昭和16(1941) ※1
- ・『京濱電力』 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/京濱電力>
- ・『土地台帳(明治期)』 及び公図 法務局

9 現況写真



北外壁面



北外壁面



西外壁面防球ネット(フレーム+亀甲金網張り)



外壁の構成



宿直室(左:校舎、右:増築便所棟)



増築便所棟 西面



増築便所棟 作業スペース 南面



左:増築便所棟作業スペース、右:宿直室 東面



増築便所棟流し



湯呑所、宿直室 東外壁



左:湯呑所、右:便所 東面



渡り廊下(便所側より)



玄関ポーチ天井



玄関建具枠線形



軒桁納まり



外壁出隅



土台



体操場 南面



体操場 北面



体操場 西面



体操場 東面



教室 南面



教室 北面



教室 西面



教室 東面



裁縫室 南東面



裁縫室 南西面



廊下(西より)



廊下(東より)



便所前土間(廊下より)



宿直室縁側(南より)



宿直室(南和室) 西北面



宿直室(南和室) 東南側



宿直室(北和室) 北東面



宿直室(北和室) 南東面

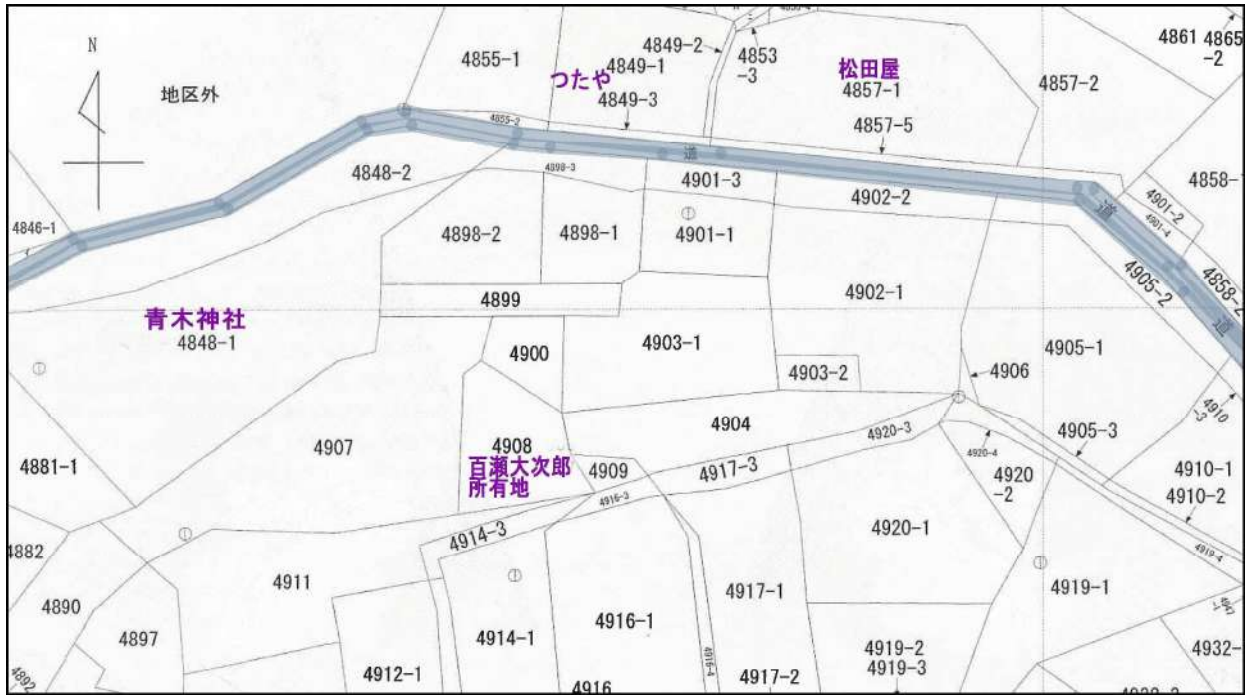
奈川小学校変遷一覧表

※学校沿革誌記載史料に加筆したもの



※入山区運営の入山分教場の設立は、文献により、明治27年、28年、30年の説がある。

◎当初の分教場(入山区運営)の場所



『昭和55年作成公図』(法務局)に加筆

◎ 入山区運営で発足した入山分教場の位置

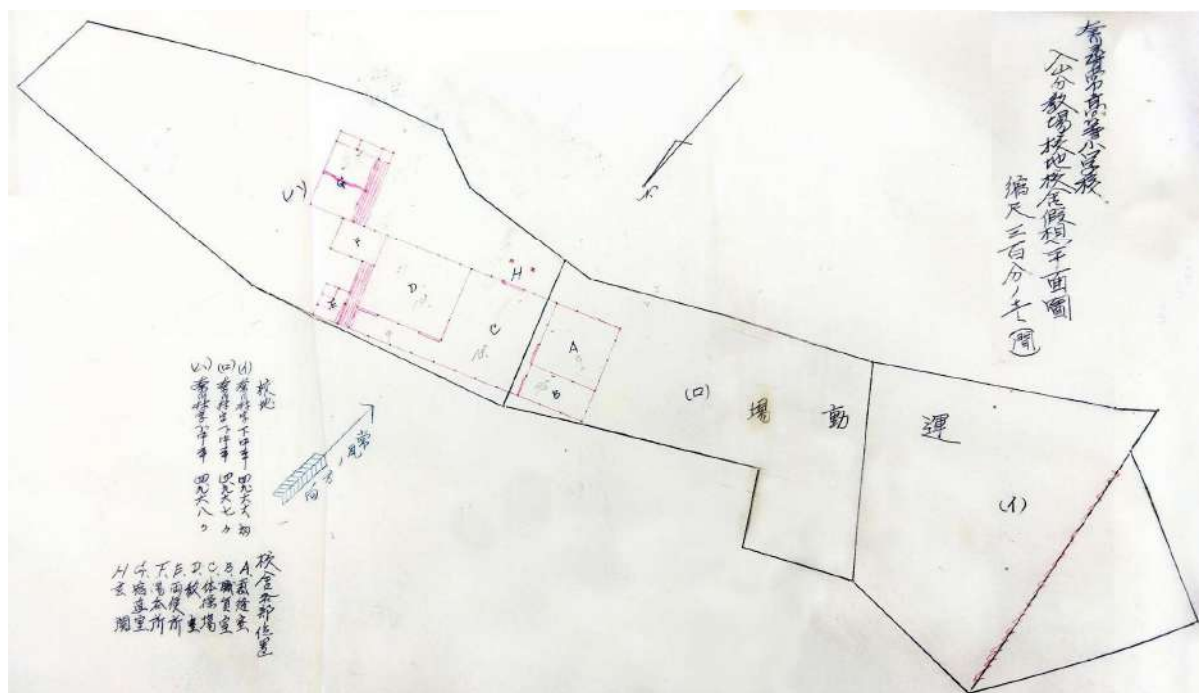
当初の分教場は、奈川村誌及び学校沿革誌の年表によれば明治30年、学校沿革誌の中の元在校生の座談会の記録では明治28年、南安曇郡誌によれば明治27年に開校したとある。座談会では「お宮の近くの百瀬代次郎という、空き家の8畳と6畳の部屋を借りて授業を始めた」と記録されている。お宮というのは青木神社のことと考えられ、その近くで百瀬代次郎所有地を、法務局蔵の明治時代の土地台帳で探した。その結果、百瀬代次郎ではなく百瀬大次郎所有地がいくつか見つかった。その中で「お宮の近く」と言える敷地が、「奈川村入山4908番」である。現在の公図と当時の境界線は差異があるかもしれないが、おおよそ、本報告書の「位置図」に示した場所になる。現在そこにある建物(下の写真)は、当時のものであるかどうかは不明。

字		入山		地番		四千九百八番	
地目	反別	地租	反別	内書	外書	沿革	等級
宅地	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
10		五九		大		明治三十二年法律第二十号 増徴額 1003 明治三十二年法律第二十号 増徴額 1005	〇
				10907		昭和六年三月法律第二十号 増徴額 1003 昭和六年三月法律第二十号 増徴額 1005	〇
						昭和十一年六月法律第三十六号 増徴額 1003 昭和十一年六月法律第三十六号 増徴額 1005	〇
明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治	明治
日年	日年	日年	日年	日年	日年	日年	日年
						明治五年 十月五日 所有権移転	〇
						百瀬大次郎 百瀬大次郎 百瀬大次郎	〇

百瀬大次郎
他のページでも
大次郎の表記。
代次郎は無し

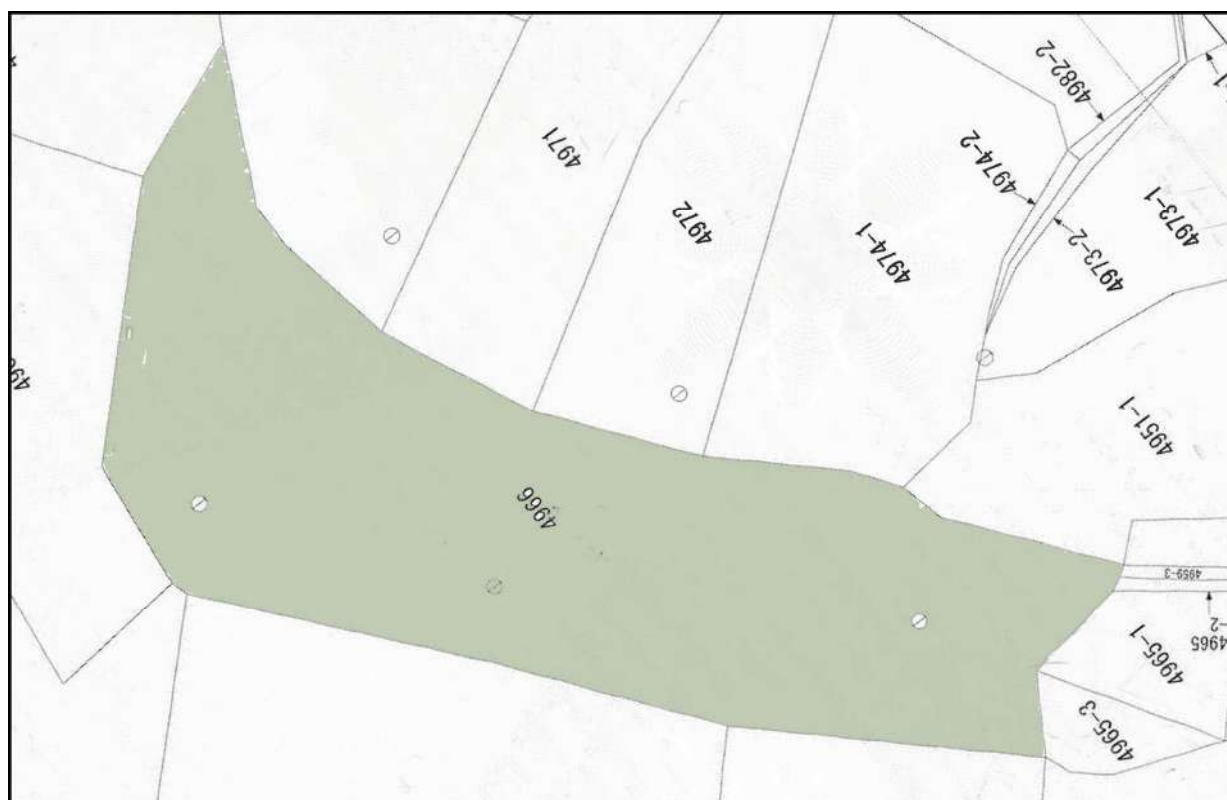


◎入山分校の校地の変化



『学校建築関係綴』(松本市文書館蔵)より、入山分教場校地校舎假想平面図

- ・校地の地番は、奈川村字下中平4966(イ), 4967(ロ), 4968(ハ)の3筆である。
- ・上図(イ)の筆(4966)の中の赤でなぞった線は書きき間違い(不要線)を消したものと思われる。

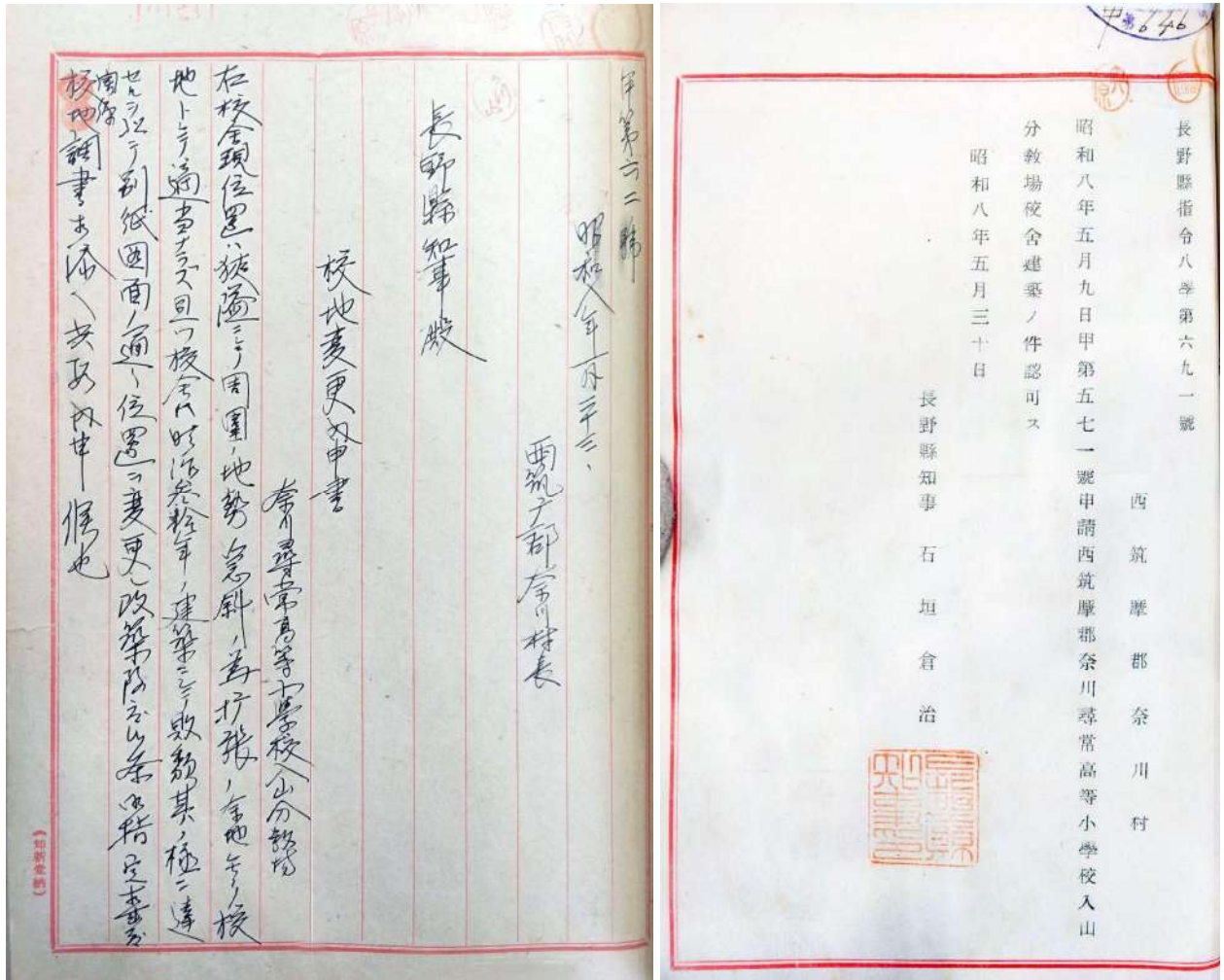


『昭和55年作成公図』(法務局)より、校地の筆(4966)に着色した図

- ・上図の3筆が合筆されて1筆になっている。敷地形状が変わっているので、他の筆からの合筆もあった可能性がある。北側は明らかに敷地が増えている。(公会堂敷地か)

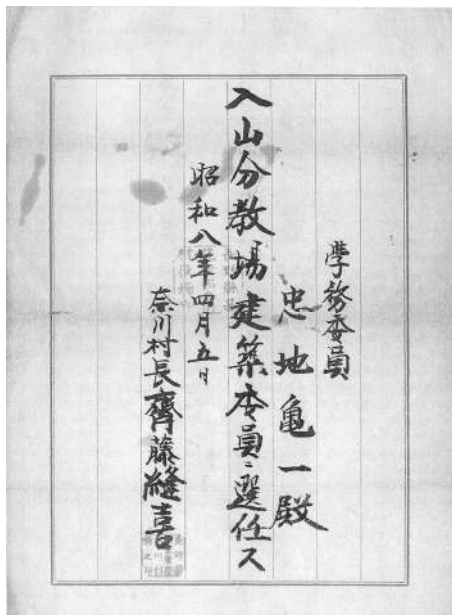
※上の二図は縮尺が同じではありません。

◎入山分教場の建築の流れ



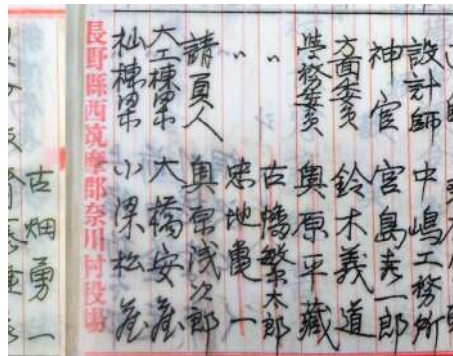
『学校建築関係綴』(松本市文書館蔵)より、校地変更内申書(控え)と入山分教場校舎新築の認可書

- ・昭和7年(1932)に建設が村議会により議決、6月15日付で図面と工事設計、仕様書が納入されている。
- ・校地の変更の内申書が、昭和8年(1933)1月23日に村長から知事宛に出されている。
- ・認可の申請が昭和8年(1933)5月9日、認可となったのが同30日、開校式が9月23日という流れであるが、P6、7にあるように、その前年より敷地工事(樹木伐採撤去、造成か)と製材を行なっている。



『学務委員選任通知書』(忠地義光氏蔵)

- ・学務委員は、竣工式招待者芳名に、奥原平藏、降幡繁太郎、忠地亀一の3名記載がある。奥原は村会議員、降幡は元老、忠地は村会議員及び軍人分会長としても記載がある。
- ・工事関係者は、竣工式招待者芳名によれば、設計が中嶋工務所(松本市)、請負人が奥原浅次郎(地元の人)、大工棟梁が大橋安蔵、杣棟梁が小梁松蔵と古畑勇一である。



※大工棟梁：建築現場で工事を仕切る大工職。

※杣棟梁：山から木を伐り出し、製材加工作業を仕切る杣職。

『学校建築関係綴』より、入山分教場竣工式招待者芳名の一部

◎設計書・仕様書・図面・現況平面図



『奈川村入山分教場建築設計仕様書』 松本市文書館蔵

- ◎次ページからの設計書、仕様書は上の史料による。
- ◎設計図面は、学務委員忠地亀一家に伝わるもの(忠地義光氏所蔵)。おそらく、図面と上の史料とはセットのものであると思われる
- ◎現況図は、本報告の受託者が調査し作成したもの。

入山分教場新築工事設計書

西筑十郡奈川村入山地籍

(甲號)

調査
設計年
昭和七年六月五日
設計者

一 桁行於鹿間 木造平家建家根小板葺方造校舎 片棟
梁間四間三尺

此建坪 四拾九坪五合

一 桁行四尺五寸 木造平家建家根小板葺切妻造玄關 片棟
梁間六尺

此建坪 七合五勺

但し校舎軒高土呂木上端より軒桁峰迄十三尺 軒出柱真より鼻隠板外面
迄三尺五寸 家根勾配五寸 軒先裏板打其他木小舞打小板二寸足葺
外部西澤下見板打クレソート澤より内部全齋床板張り天井
張りトス
玄關柱の構材佛用軒出の岩石上端より桁峰迄八寸五寸 軒出柱真
より鼻隠板外面迄三尺五寸 家根勾配五寸



流建坪六拾五坪
總工事費金部千四百零圓七拾三錢六厘也

二 月 氏
合資 建築設計事務所

工 事 種 類	名 稱	材 名	長	厚巾 徑	數 量	單 價	金 額	單 價	摘 要
窓	窓		七		二九	二二〇	六三八	四三七	
横	横		六五		八	二〇〇	一五〇	四〇五	
出	出		六五		一〇	二〇〇	二〇〇	四〇五	
合	合		六五		三	二〇〇	六〇〇	四〇五	
出	出		六五		五	二〇〇	一〇〇〇	四〇五	
靴	靴		六		四	二八〇	一一二〇	四〇〇	
口	口		六		四	八〇	三二〇	一〇〇	
教	教		六		三	三〇〇	九〇〇	四〇〇	
全	全		六		二	四八〇	九六〇	六〇	
窓	窓		六		一	三〇〇	九〇〇	四〇〇	
窓	窓		六		一	五二〇	五二〇	四〇〇	
窓	窓		六		一	五二〇	五二〇	四〇〇	
<p>二丁毎満作 一丁毎目三休標場、席下見用 毎目レール二打</p>									

(2) 號

工 事 種 類	名 稱	材 名	長	厚巾 徑	數 量	單 價	金 額	單 價	摘 要
窓	窓		九		二	五四〇	一〇八〇	五四〇	
天	天		六		五	〇五	七五	〇五	
天	天		九		四九	六	二九七〇	九	
天	天		三		一七	八	三〇六	一三	
天	天		九		一八	三四	三〇七二	一三	
天	天		二		四	二八	一一二	二八一	
天	天		二		二六	三七	九〇二	三七五	
天	天		一五		二	四七	九四	四六八	
天	天		二		一三	三八	四九四	七五	
天	天		一八		六	五五	三三〇	一一二五	
天	天		四		四	一〇〇	四〇〇	二八一	
<p>大幕居部十才長四才一 内二才使用モ合ハ 上記ノ張上坪ノ手入 張上才、五才以上一及三才木張ト入 ト使用</p>									

「巻」月報

2047

(乙號)

工事種類
名稱
材名
長
厚巾徑
數
量
單價
金額
額
單量價
摘
要

壁		小板		小板	西神木	壁止木	戸袋													
地面		梅					材料													
		葺豆 三			一三五〇	一二〇〇		尺												
					四五〇	二〇〇		尺												
一面 三〇〇	壁 部	一面 一〇	家 根 部		三五〇	六〇〇	一式													
八〇		一三〇			一〇五〇	一〇〇〇	三													
一〇四〇		一九三三			一八〇二	三六七〇	三													
					二〇八三	二〇〇														
仕 宿 書 通			手 割 十 赤 身 筋 七			布 便	圖 示 通													

工事種類
名稱
材名
長
厚巾徑
數
量
單價
金額
額
單量價
摘
要

		天 井 板	天 井 棹										天 井 煙 通	落 機						
北海 板	山 青 板	赤 杉 上 青 板	上 青 板										礎	梅						
上 青 板			一 二 〇〇	六 〇〇	一 二 〇〇	三 〇〇	九 〇〇	九 〇〇	一 三 〇〇	六 〇〇			二 一 〇〇	二 四 〇〇						
七 五	一 五	六 五	二 一 〇〇	六 〇〇	二 〇〇	四 〇〇	二 〇〇	四 〇〇	四 〇〇	一 〇〇										
六 〇〇	七 〇〇	八 〇〇	五 〇〇	五 〇〇	三 〇〇	六 〇〇	一 〇〇	三 〇〇	三 〇〇	四 〇〇										
四 五	一 〇 五	五 二 〇	一 〇 五	九 〇〇	六 〇〇	三 〇〇	三 〇〇	九 〇〇	一 三 〇〇	四 〇〇										
			三 〇〇	一 五 〇	三 〇〇	七 五	二 三 五	二 三 五	三 〇〇	四 〇〇										
	押 入	席 下		席 敷 及 席 分									押 入 天 井 用							

工務局 月氏

工務局 月氏

品名	材名	長	厚中徑	數量	單價	金額	單量價	摘要
山計	西面	尺	尺	七五	二〇〇〇	一五〇〇		合
襖		五七〇	二九五	二〇〇	一七〇〇	三六〇〇		押入用
障子	檜材	五七〇	二二〇	八〇	二〇〇〇	一六〇〇〇		
唐戸	檜材	五七〇	二五〇	二〇	一五〇〇	三〇〇〇		
雨戸		五七〇	二九五	五〇	一三〇〇	七二〇〇		
山計				七五	二〇〇〇	一五〇〇		合

品名	材名	長	厚中徑	數量	單價	金額	單量價	摘要
山計				一八〇	二〇〇	三六〇〇		南島廣破凡版下見板等三回塗仕事
塗仕事				一八〇	二〇〇	三六〇〇		
金物	金物部			七〇	五〇	一五〇		合掌虎綿仕用 女衾座鉄仕平 方杖鉄綿仕用 合 方杖虎綿仕用 合 四〇〇元有元元
鉄物		二六〇	一〇	二〇	八〇	一六〇		箱金物仕用 座鉄女衾仕平
山計				七〇	五〇	一五〇		

乙號

工事種類

工 事 種 類	名 稱	材 名	長	厚 巾 徑	數 量	單 價	金 額	單 價	摘 要
	鑄		七〇	三〇角	一〇〇	〇〇〇	五〇		專座認識牌用
	翔子板		一六	四〇九	二〇	〇〇〇	四八〇		座鉄女橋牌
	ホント		四五	三〇九	二〇	〇〇〇	一五〇		座鉄女橋牌
	ホント		一四	四〇九	一〇	〇〇〇	一五〇		板木土台結作用及柱土台不結作用ニテ
	ル		二〇	二〇	一〇	〇〇〇	一〇〇		遊田釘共一式釘ニ在ル
	兩榑				一	一〇〇	一〇〇		釘金物共一式
	鑿榑		一三	四寸	二	〇〇	二〇〇		仕稱言一通
	洋釘	大小			五	〇〇	五〇〇		鑿榑及釘金物共一式
	小計						二二七二		凡下不厚ニ倍半七

(乙 號)

工 事 種 類	名 稱	材 名	長	厚 巾 徑	數 量	單 價	金 額	單 價	摘 要
	邊仔	備位 表仔			一	二〇〇	二〇〇		
	小計						三〇〇		
	大工				三五	〇〇〇	三五〇〇		本工大工等一及建業共一式
	人丈				五	〇〇〇	四〇〇〇		建業平伝人丈
	小計						三九〇〇		
	雨水流				一	五〇〇	四五〇		三四尺
	土葺								厂首土葺二個及丁字土葺一而手要入

書計設事工

(甲號)

調 査
 設 計 年 月 日
 設 計 者

一 折行 九尺 木造 平家 連切妻 造 便所
 此 建坪 一坪 五合

一 折行 二間 木造 平家 建三 方 疊 湯 吞 室
 此 建坪 三坪

一 折行 三十八尺 片庇 渡 廊 下
 此 建坪 一坪 五合

但し便所の軒高土台上端より桁上端迄九尺六寸湯吞室軒高は
 左軒出の何ぞ柱より鼻隠板外面迄二尺外部下見板張りと
 家根勾配の何れも四寸勾配少板二寸足葺中よス
 湯吞室内部腰羽目板張りと土間粉土叩き仕上り
 便所内外部及廊下腰羽目板張りとス

吉棟 吉棟

類 名	材 名	長	厚 巾 徑	數 量	單 價	金 額	單 價	摘 要
	雪止木	一五〇〇	三	一	四〇〇	四〇〇	八三	
	力計	一二〇〇	三	一	三〇〇	三〇〇	七〇六	
合計金		三百七拾四圓			五拾錢			

中島二番月新

杉木

杉木

九

四

一

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

杉木

杉木

九

四

一

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

五

三

三

一

三

三

一

九

摘要

摘要

摘要

摘要

摘要

土台

土台

九

工 事 名 稱 材 名 長 厚巾 徑 數 量 單 價 金 額 單 量 價 摘 要

杉	杉	腰羽目 杉木	合 框	炭 板	席 板	根 太	合	根 受	根 太	杉 板
六 〇	三 〇	九 〇	一 七 〇	九 〇		三 〇	九 〇	九 〇	三 〇	百 六 多 枚
		二 〇	三 〇	一 〇				二 〇	二 〇	尺 米
九 〇	一 〇	二 〇	七 〇	四 〇	二 〇	一 〇	二 〇	四 〇	一 五 〇	面 積
九 〇	三 〇	一 五 〇	五 〇	四 〇	二 〇	五 〇	三 〇	三 〇	四 〇	一 〇
一 〇	二 五 〇	三 〇	三 五 〇	五 〇	二 〇	五 〇	四 〇	四 〇	六 〇	〇
一 〇	三 〇	二 〇	八 五	一 三 五		一 〇	三 〇	三 〇	一 〇	
七 便 用				便 所 工 用 甲		便 所 内 清 掃 下 用		便 所 用	清 掃 下 用	上 部 一 層 下 部 二 層 下 部 三 層 下 部 四 層 下 部 五 層 下 部 六 層 下 部 七 層 下 部 八 層 下 部 九 層 下 部 十 層 下 部 十 一 層 下 部 十 二 層 下 部 十 三 層 下 部 十 四 層 下 部 十 五 層 下 部 十 六 層 下 部 十 七 層 下 部 十 八 層 下 部 十 九 層 下 部 二十 層

(乙 號)

工 事 名 稱 材 名 長 厚巾 徑 數 量 單 價 金 額 單 量 價 摘 要

杉	杉	腰羽目 杉木	合 框	炭 板	席 板	根 太	合	根 受	根 太	杉 板
六 〇	三 〇	九 〇	一 七 〇	九 〇		三 〇	九 〇	九 〇	三 〇	百 六 多 枚
		二 〇	三 〇	一 〇				二 〇	二 〇	尺 米
九 〇	一 〇	二 〇	七 〇	四 〇	二 〇	一 〇	二 〇	四 〇	一 五 〇	面 積
九 〇	三 〇	一 五 〇	五 〇	四 〇	二 〇	五 〇	三 〇	三 〇	四 〇	〇
一 〇	二 五 〇	三 〇	三 五 〇	五 〇	二 〇	五 〇	四 〇	四 〇	六 〇	〇
一 〇	三 〇	二 〇	八 五	一 三 五		一 〇	三 〇	三 〇	一 〇	
七 便 用				便 所 工 用 甲		便 所 内 清 掃 下 用		便 所 用	清 掃 下 用	上 部 一 層 下 部 二 層 下 部 三 層 下 部 四 層 下 部 五 層 下 部 六 層 下 部 七 層 下 部 八 層 下 部 九 層 下 部 十 層 下 部 十 一 層 下 部 十 二 層 下 部 十 三 層 下 部 十 四 層 下 部 十 五 層 下 部 十 六 層 下 部 十 七 層 下 部 十 八 層 下 部 十 九 層 下 部 二十 層

月 氏

仕 様 書

一、^柱下杭亦ハ要材直木良質ノモノ皮剥キ致シタルモノ平面圖ニ示ス

箇所ニ指定長ノモノヲ打込ミ杭頭ニ長柄ヲ設ケ土台下端扣穴ニ
差シ土台木横面ヨリ大釘打チトス

一、杭ホト土台ホヲ羽子^板ボルトニテ締付クベシ

一、土台ホハ柱根トラ羽子^板ボルトニテ締付クベシ

一、床カ床下石ヲ据付クル所ハ臺掘ヲ致シ厚五寸以上臺尺方栗石ヲ入レ
搗キ堅メ其上ニ石ヲ据付クベシ

一、土台下埋石ハ見付キニ石面ヲ表シ出来得ル限り石合端ヲ密着セシムル
外土台ホ当リヲ水平ニ据ヘ付クベシ

一、土台ホ校舎分^{四寸五分}角其他^四角ノ栗割角ヲ使用ス尤モ見隠レケ所

ニ使用ノモノハ五分迄ノ丸身ヲ許スモ現場ニテ検査ノ上決定スルモノトス



一、大梁ハ唐材丸太材ヲ使用スルモ根太彫リ及赤ク坂当リヲ削リ皮剥キモタル事
一、柱ハ母榫等ニテ上小管割角モトス才一真附キモ使用ノ場合ハ見
隠レヨリ有割ヲ掩スベシ

一、柱ハ見得掛リ總テ正角良材ヲ使用シ見隠レ分ハ四分以内ノ丸見ヲ許スモ検査
ノ上決定スルモノトス

一、敷板、軒桁共大節枯節アテミキ等ナキ良材ヲ使用シ所要ヶ所ニ於テ陸梁
ヲ扶ミテボルト締メトス

一、陸梁ハ丸太ニ付キ皮剥キ致シ継手ハ二尺持出し継キ下端ニ陸梁繫キヤ
瓦テ上端ニハ長三尺巾ニ寸厚ニ分ノ平鉄ヲ當テボルトニテ締付ケ梁兩端ハ
桁ハ渡臆ニ仕掛クベシ

一、妻陸梁モ一方桁ハ渡臆一方ハ陸梁ハ長柄差シトシ羽子板ボルト二本ニテ陸
梁ト締付クベシ

一、合掌押角モノ兩側墨通シ方杖当リ桁束当リ正角物ニテ仕口ハ上ノ
方扇蟻柄下ノ方繫柄ニ切刻ミ置面、如ク仕掛ハ上端母屋当リ渡臆ニ
下端方杖當リ切刻ミ母屋受ホラ上端ハ大釘二本宛ニテ打ツモノトス

一、真束、南瓜束 材亦括ハ置面、如ク切刻ミ扶攢ニテ締付クベシ
一、方杖前々材上下斜形開付柄ニ造リ上ノ方合掌ハ下ノ方真束及南瓜束
ハ嵌込シ建揚ミノ事

一、母屋ハ大節枯節ナキモノ下端合掌當リ渡臆ニ切刻ミ継手ハ合掌
上ニテ蟻柄継ギトシ上端ニ種當リ一尺寸間ニ仕掛ノ事

一、棟木長一尺五寸迄掛継ギ上端ハ鍋ニ削リ下端束柄冗彫リ兩端ハ
南瓜束ヌハ瓜束ニ差堅メノ事

一、種木ハ継手長大斜五寸トシ母屋上ニテ乱シ継ギ上ノ方ハ扇蟻トシ棟木
ニ落シ込ミ母屋毎大釘打チトス

一、鼻隠破風板等材又ハ椀材木拵ハ継手ハ目違差ニ種鼻毎又ハ種ニ
通り能クカケ上端ハ家根勾配ニ倣ヒ削リ度ヲキトス

一、赤板ハ大幣ノ椀割レ腐レ等ナキ良質ハモノ板巾ヲ揃ヘ板巾根太毎大
釘三本宛打六尺毎ニ乱レニ質弱又ハ雇質仕口張立ワベシ

一、窓台ハ敷居代用トナルモノニテ兩端長拵トシ柱内ニ合拵柱締メ内法リハ
面打チ外面ハ柱外ヘ一寸持出し上端ニ水切りヲ付ケ勾配削リレ下端ニ羽目
当リ小穴決リ垂ニ向柱拵穴彫リ建揚シトス

一、窓鴨居ハ柱ハ大入拵差シトシ下端ニタ筋清決リ及硝子戸ノ堅穢
ハニ航深五分巾厚子ハ椀ノ寸法ニ倣ヒ彫リ込ミ上端向柱拵穴彫トス

一、羽目巾亦モ大幣ノ椀節ナキモノ兩端柱ハ造ケ返シ大入拵差シ床カ板小
孔ニ嵌込ミ見得隠レヨリ釘打ノ事

一、羽目板小幣モ矧合セ五分合拵リ四方小穴投リハ嵌込ミ板巾ニ釘

三本宛櫃毎ニ打張立テノ事

一、合笠木、胴縁トモ上端角切面取リ下端羽目板当リ拵リ取り兩端柱
ハ遺レ返シニ取付ケ見隠レヨリ大釘打トス

一、天井廻縁小幣ノモ、継手目違拵入レ隅々留メ仕合セ上端棹當リ
切込ミ柱ハスキ込見得隠レヨリ大釘打ノ事

一、天井棹上小幣材木拵ハ継手鴉ニ切リ込ミ目違差ニ廻縁ハ二尺五寸
間ニ架渡シ棹配リ三尺目毎ニ通り良ク假リニ取設ケ板張リ上
釣ホニテ堅固ニ陸梁其他ハ取付クベシ

一、天井板米枚又ハ椀材上小幣ノモ、木拵ハ矧キ合セ五分以上
巾棹毎ニ釘ニ本打隅々氣接棹嵌込ミノ事


一、氣接棹松材木拵ハ堅ホ一寸二分角天地椀厚一寸五分巾ハ尺三分モ
隅々留ニ仕合セ廻リハ五分板ヲ打チ上、方ニ五分目金綱ヲ張リトス

本工の設計書ニ記載ナキモ天井工事トシテ合入スルヨリ請員人オ負担トス

一、外部付土台ホハ継手目違拵差ニ下端馴染克ク上端水切夕配ニ板ヒ決リ取り本土台ホハ釘ヲ以テ三尺目ニ折付クベシ

一、定規柱、化粧柱、大節枯等ナキモノ隅留メニ仕合セ柱面ハ大釘ヲ以テ子島ニ折付バク下見板当リオハ鎧抉リテ致スベシ

一、額縁モ大節枯等ナキモノ隅留メニ仕合セ下見板当リ鎧抉リテ致シ柱、子島ニ大釘打ケトス

一、下見板枚又ハ椀小節材亦拵  ヲ上置、如ク引違ヒトシ継手目違ヒ拵入レ鎧重ネセ分上乱レニ張り板巾向柱柱毎釘三本宛打テ通リ能ク定規柱及額縁ハ彫込ニ張りセツベシ

一、壁仕事ハ下地小舞拵キ堅横井息葎一尺向ニ両端大釘打ノ上小舞

縄ニテ拵キ付ケ其ノ上更ニ普通葎四五本宛ヲ以テ立横一寸五分目返ニ細縄(縄半ニ拵)付下地拵下塗り粘土葎サ切澤山切入レ度々切返シ練リ返シノ上使用中塗りハ中塗り切ト砂ヲ切込シ斑ナキ漆塗り(上塗り斑直シ)ノ上大津ヲ施スベシ

一、家根小板葎キハ枚又ハ枘或ハ椀等ノ子拵キ赤身勝枘板ヲ以テ葎足ニサトシ下塗りキ枘ニ小端釘ニテ打チ葎キ止ルベシ

一、棟包ミ板ハ長拵板ヲ以テ重ネ四枚以上トシ押ハ縁致シ兩押亦取付クベシ

一、雪止ホハ唐松丸文ニシテ皮剥キモノヲ雪止金具ニ置キ覆スベシ
雪止金具ハ六尺向ニ取り付クルモノニシテ其代金ハ雪止亦葎價中ニ合入スルモノトス

一、正面昇降口唐戸唐松材又ハ椀材 竖棧 見付ニ寸五分上下拵棧見込一寸三分

見付三寸 帯棧、中棧共 見付二寸五分 トレ鏡板杉正四分板ヲ倉糊
 見込三寸五分 三割や四方小他ニ差込ハレ仕口ハ上下摺棧ニ枚拵中帯棧ハ
 一枚拵トシ何モ押糊入レ楔打チ組立テ玉入底車ニ個及
 手掛金具錠等ヲ彫リ込ムベシ

一 出入口唐戸ハ椀材木拵ハ 笠棧 見付二寸 上棧 見付三寸五分
 摺棧 見付三寸五分 笠横帯棧 見付三寸五分 トレ仕口ハ何モ二枚拵
 差ニ押糊入レ楔締メ板ハ杉正四分板四方小他ニ入レ組
 立テ前左椀金具彫込ムベシ

一 職負室出入口 腰高硝子戸モ前左材 笠棧 見付二寸
 上棧 見付二寸五分 下棧 見付二寸五分 腰棧 見付二寸五分 中棧 笠横
 共見付二寸五分 トレ仕口ハ中組子ハ一枚拵其他ニ枚拵押糊入
 レ楔打チ腰板モ前左材 椀四分板ニ枚拵や四方小孔ニ入

組立テ玉入底車ニ個引手金具錠等彫込ニ硝子ハ八拾入レ
 ヲ使用スベシ

一 窓硝子戸前左材ニ 笠棧 見付二寸五分 上下摺棧 見付
 二寸五分 組子 笠横共 見付二寸五分 トレ仕口ハ上下摺棧ニ枚拵組
 子ハ一枚拵トシ何モ押糊入レ楔締メト致シ硝子ハ八十六
 入ヲ使用ス外 窓硝子ハ瓦テ舶来ハテ 飼ヒ堅ノ内部
 窓硝子ハ四方小他ニ入レ何モ玉入底車ニ個ヲ彫リ込ムベシ
 一 回轉窓硝子戸ハ 笠棧 見付二寸五分 上下摺棧 見付二寸五分
 組子 見付二寸五分 トレ仕口前左断硝子モ八十六入ヲ切込ニ舶
 来ハテ 飼ヒ堅ノ廻転金具ヲ取付クベシ

一 兩戸及板戸ハ 椀材ニ 笠棧 見付二寸五分 下横棧 見付
 一寸八分 上横棧 見付一寸五分 中棧 見付一寸五分 目板 椀四分五分

一、六本棧枘差を通し上下横棧小根枘差は板の椀上
 小節幸四分板三枚割や上下決り釘二寸歩の打手
 又開キ戸トス場合、蝶番は枚ヲ釣リ煽り止メ金
 具及錠ヲ附スル亦引戸トス際、玉入底車は個宛
 ヲ彫リ込ニ錠ヲ設クベシ

一、横繫硝子入障子唐松枘使用堅棧見付一寸下棧
セイ寸五分 中棧八分上棧セイ一寸七分 組子中五分 硝子枘見付
厚一寸 四分 硝子枘見付
 四分トシ仕口ハ二枚包込枘差は内部面腰押框内側ニ付子
 ヲ廻シ中組子ノ枘ハ付子ヲ貫通シテ框ニ差ス硝子枘ハ隅ニ枚
 組ニ留トス腰板米杉枘モノ傍樋部倉糊割トシテ四方小庇
 ニ入レ枘及組手等ヲ押柵入レ組立ツベシ

一、襖ハ印籠縁ト致シ下地張り日本紙ニ夕通クハト口ニ一

通りヲ張り上品の整紙ヲ以テ上張りシ引手金具ヲ付ラベシ

一、建具用木材ハ凡テ乾燥シタル良質ノモノ上小節以上タルト
 一、外廻り窓硝子戸ノ木部ハペンキ塗り仕上ケ問仕印窓硝子戸
 及ヒ板戸唐戸等ハ凡テ本地ノ倭襖障子等ノ棧縁ハ凡
 テ黒塗り仕上トス

一、建具ニ要スル蝶番、引手、錠、底車、煽り止メ等ノ代價ハ
 建具中ニ包含スルモノトス

一、雨樋ハ亜鉛鍍金鉄板三十番ヲ用ヒ両耳ハ四番鉄線ヲ
 巻キ込ニ右継手ハ小ハセ掛ケ半田蠟付ケテ事一

一、堅樋モ之前左板ヲ造リ凡テ半田蠟付ケ錠鯨付キトス
 一、ペンキ塗りクレオソート塗りハ凡テ三回塗りレタ

一、以上ハ仕様ノ大略ヲ記載シタルニ過カレシテ不明ノ箇

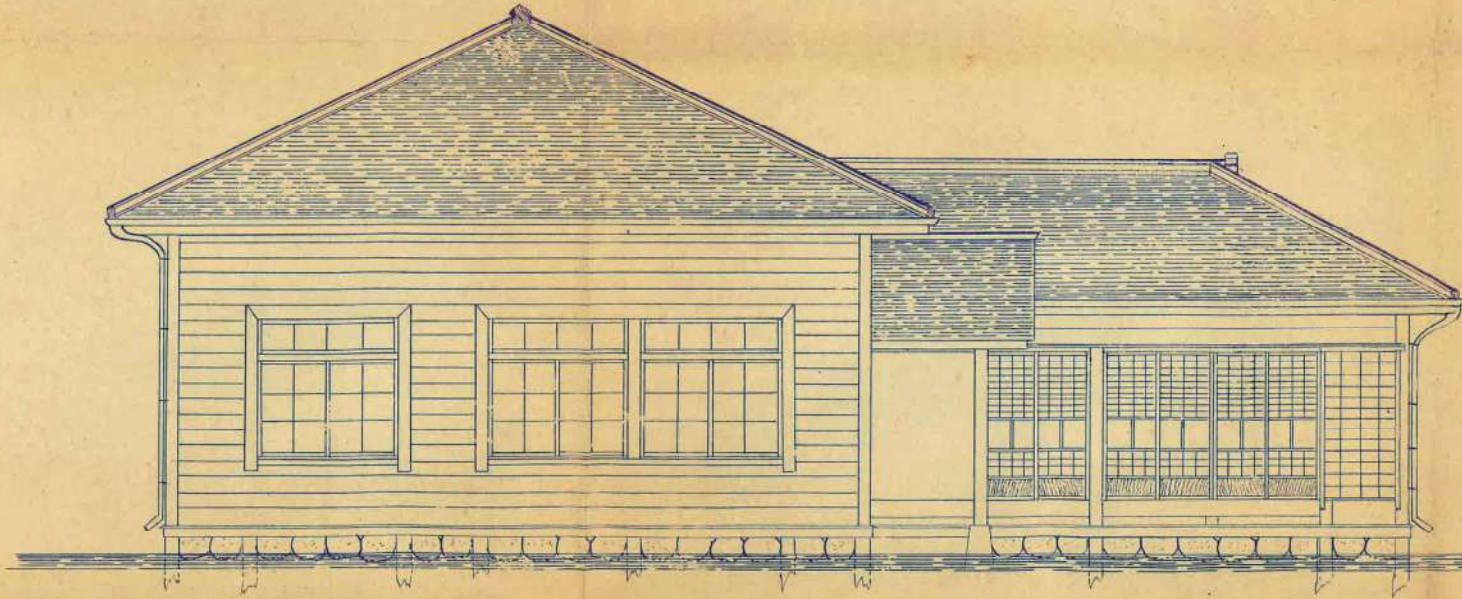
一 所ニ就テリ建築委員ノ指示ニ後ヒ施工スルシ
 一 本任様事ト設計書並ニ圖面ト対照シ万一不合ノ箇
 一 所又ハ材料記載誤シ等有ルナキニシテアラハルニテ見積
 一 當時充分調査ノ上見積リ請負契約後ニ於テ発見
 一 エタムモノヲ限リ請負金額範囲内ニ於テ員担シテ係員
 一 ノ指揮通りテ該エセシムベシ

以上



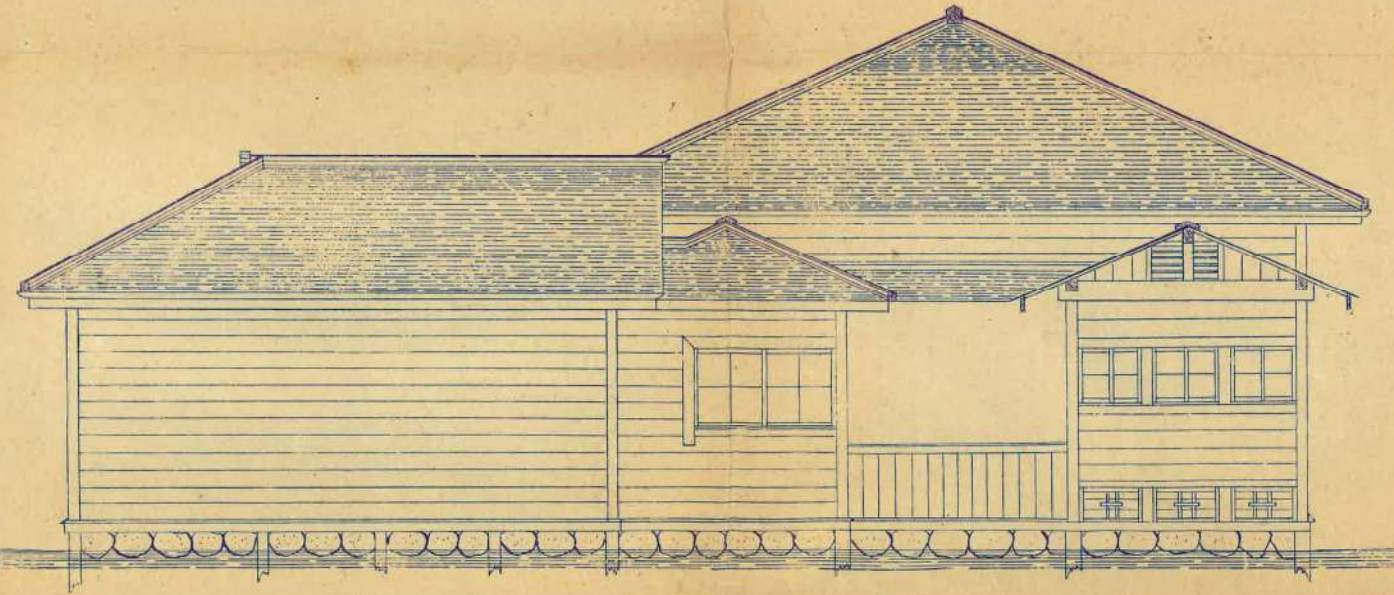
圖姿面側AB

一、分十五尺縮



圖姿面側DC事工築建全

一、分十五尺縮



圖姿面正物建屬附及舍校場教分

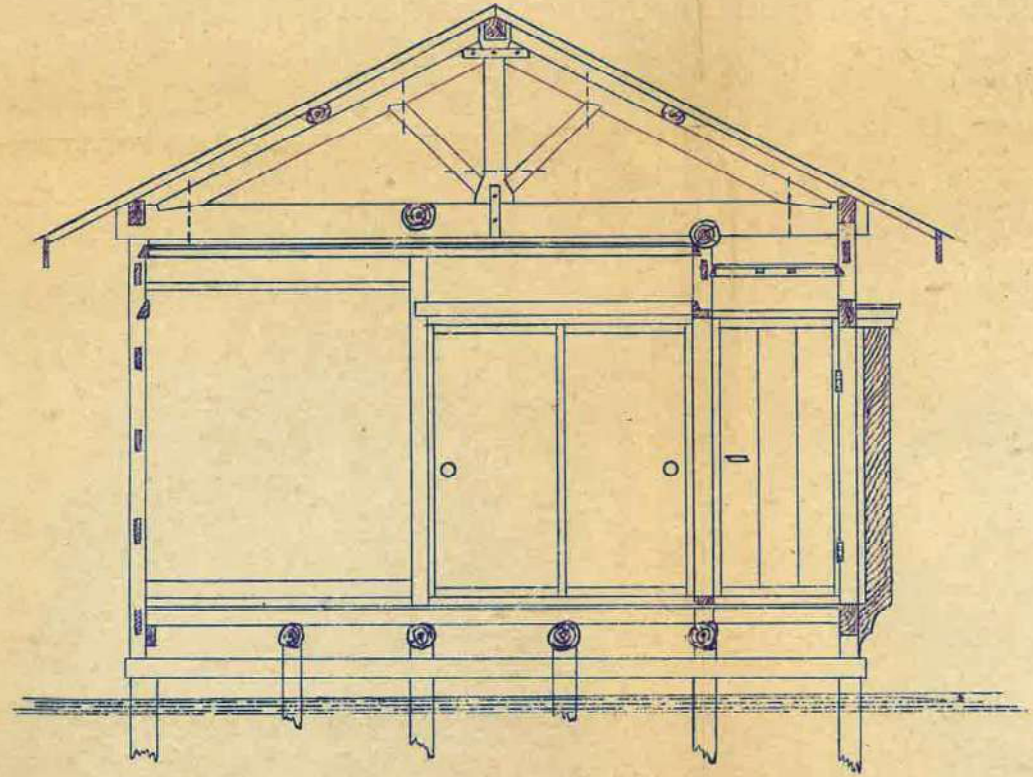
一、分十五尺縮



土木建築
電氣測量
設計請負
中鳴工務所

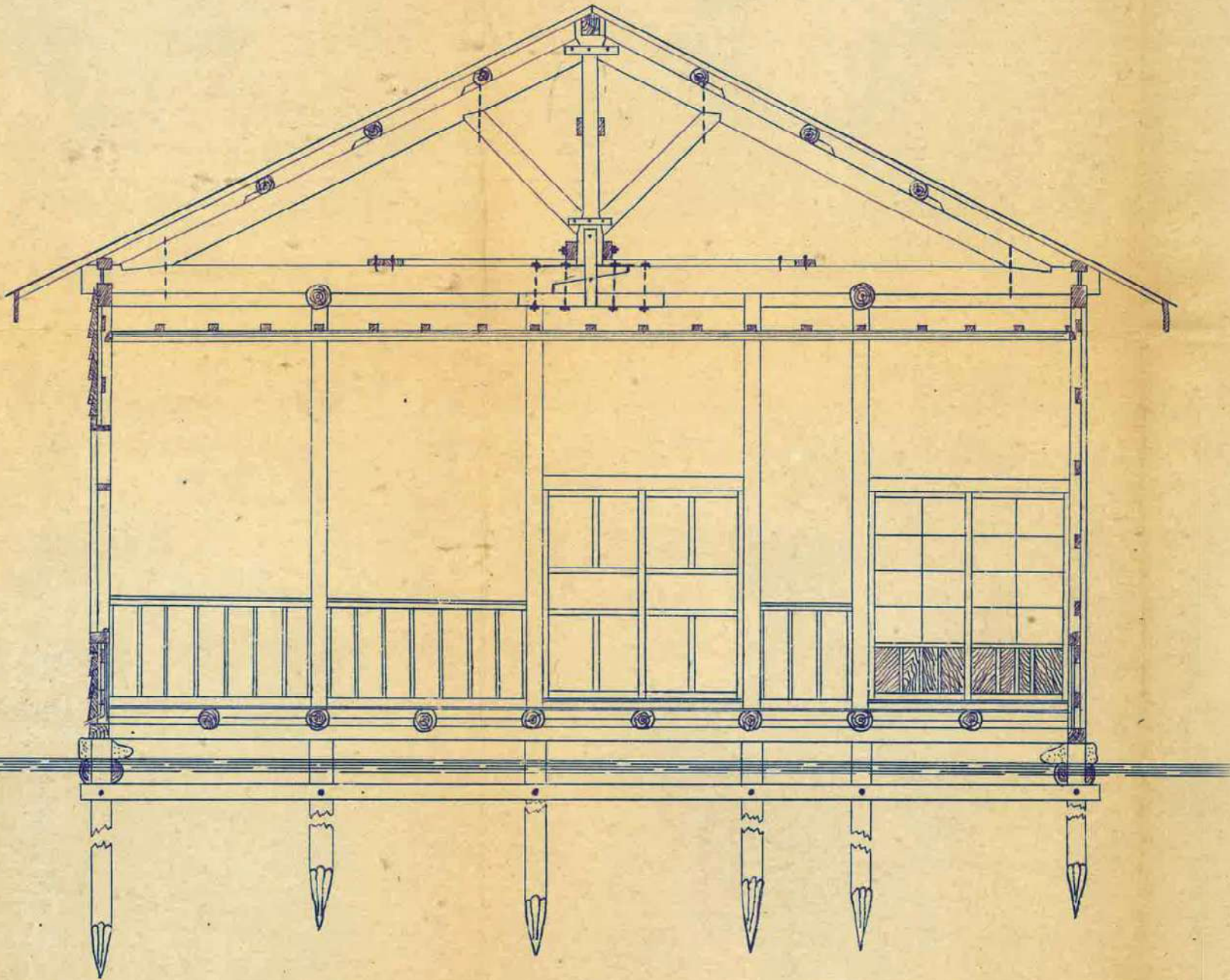
看直室断面圖

縮尺四十分之一



校舍断面圖

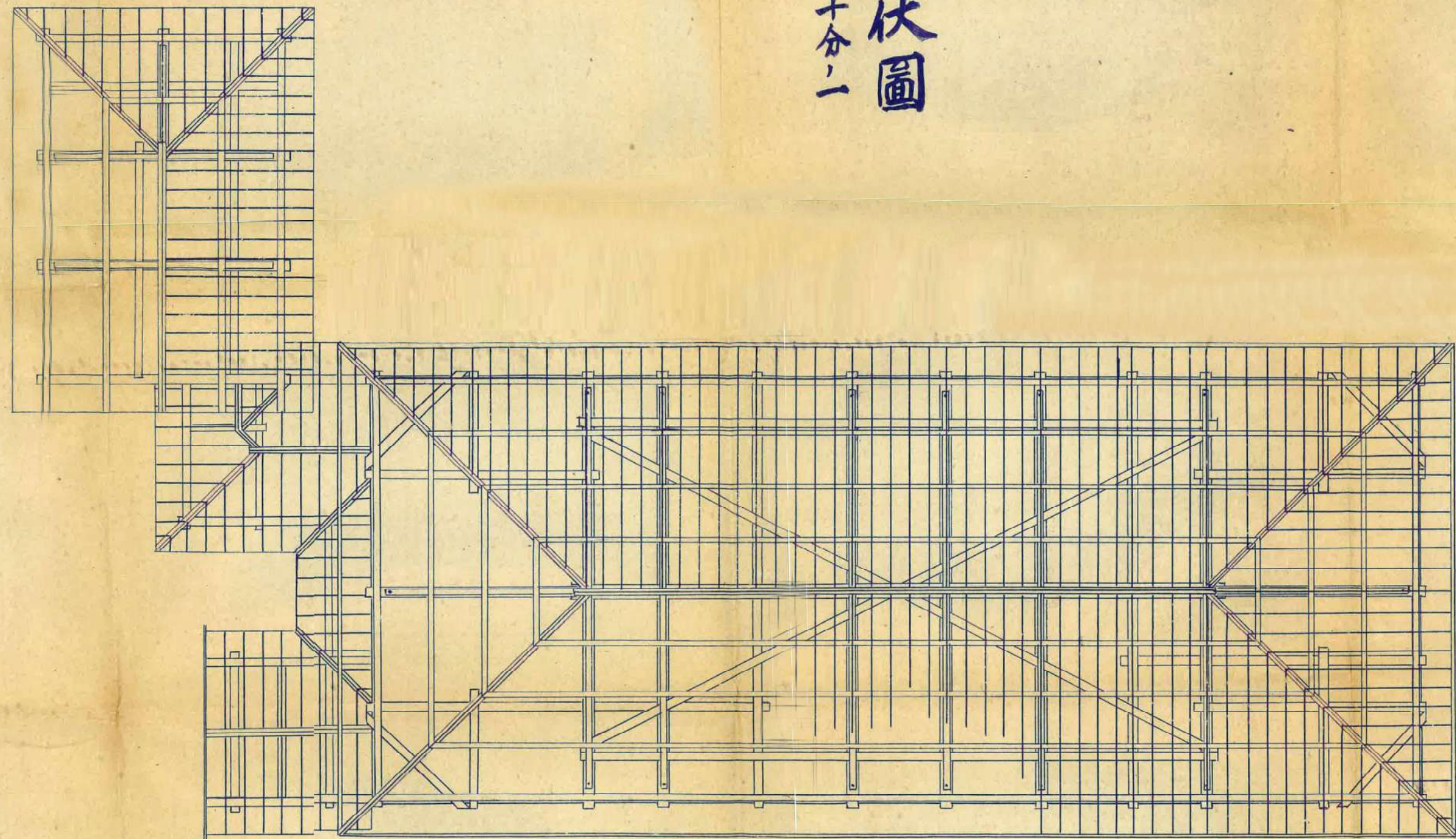
縮尺四十分之一



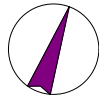
隱本市大柳町
土木建築
電氣測量
設計請負
中嶋工務所

山分教場
校舍及附属建物小屋伏圖

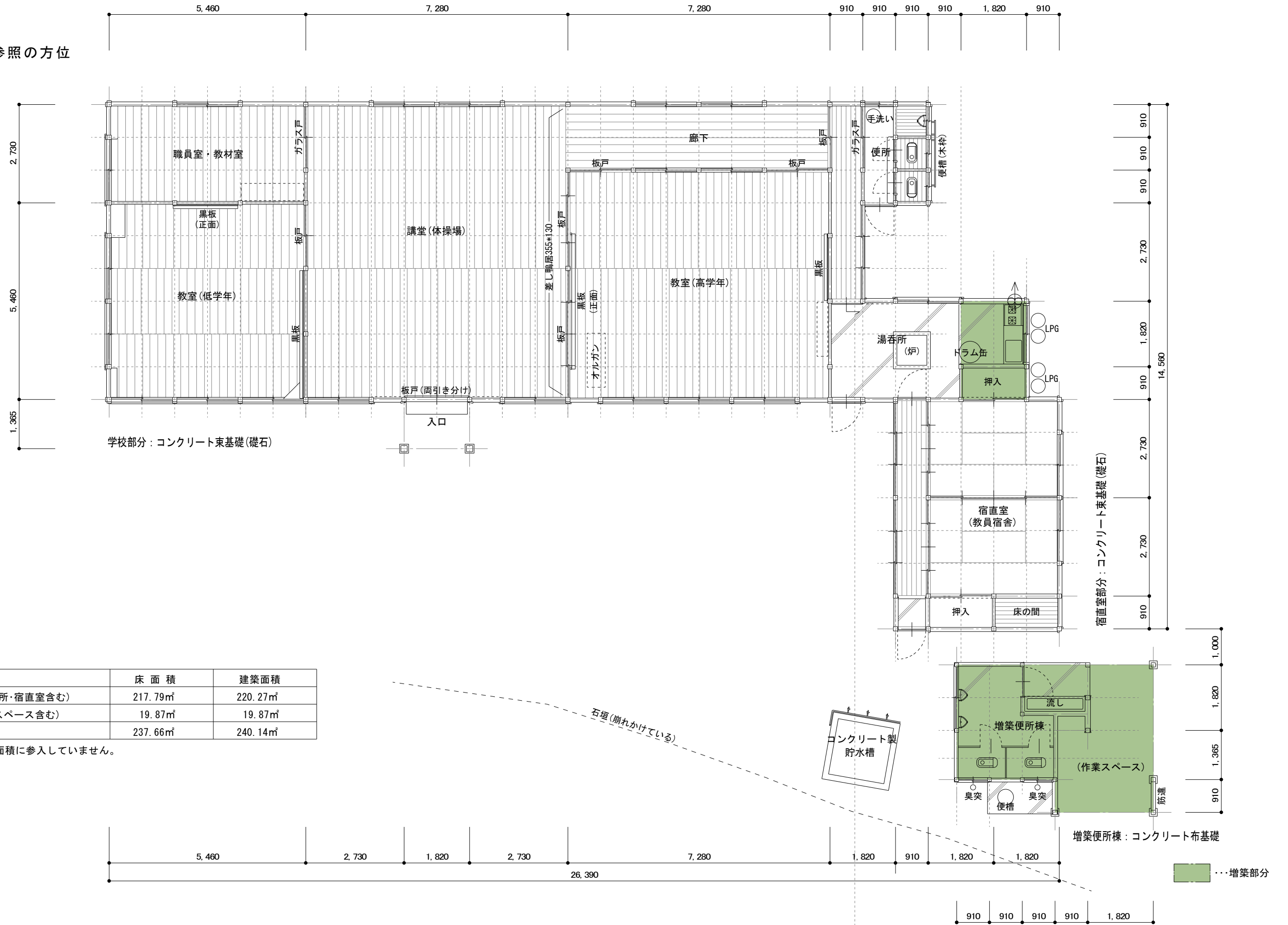
縮尺六十分之一



土木建築
電氣測量
設計繪圖
中嶋工務



元の配置図参照の方位

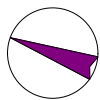
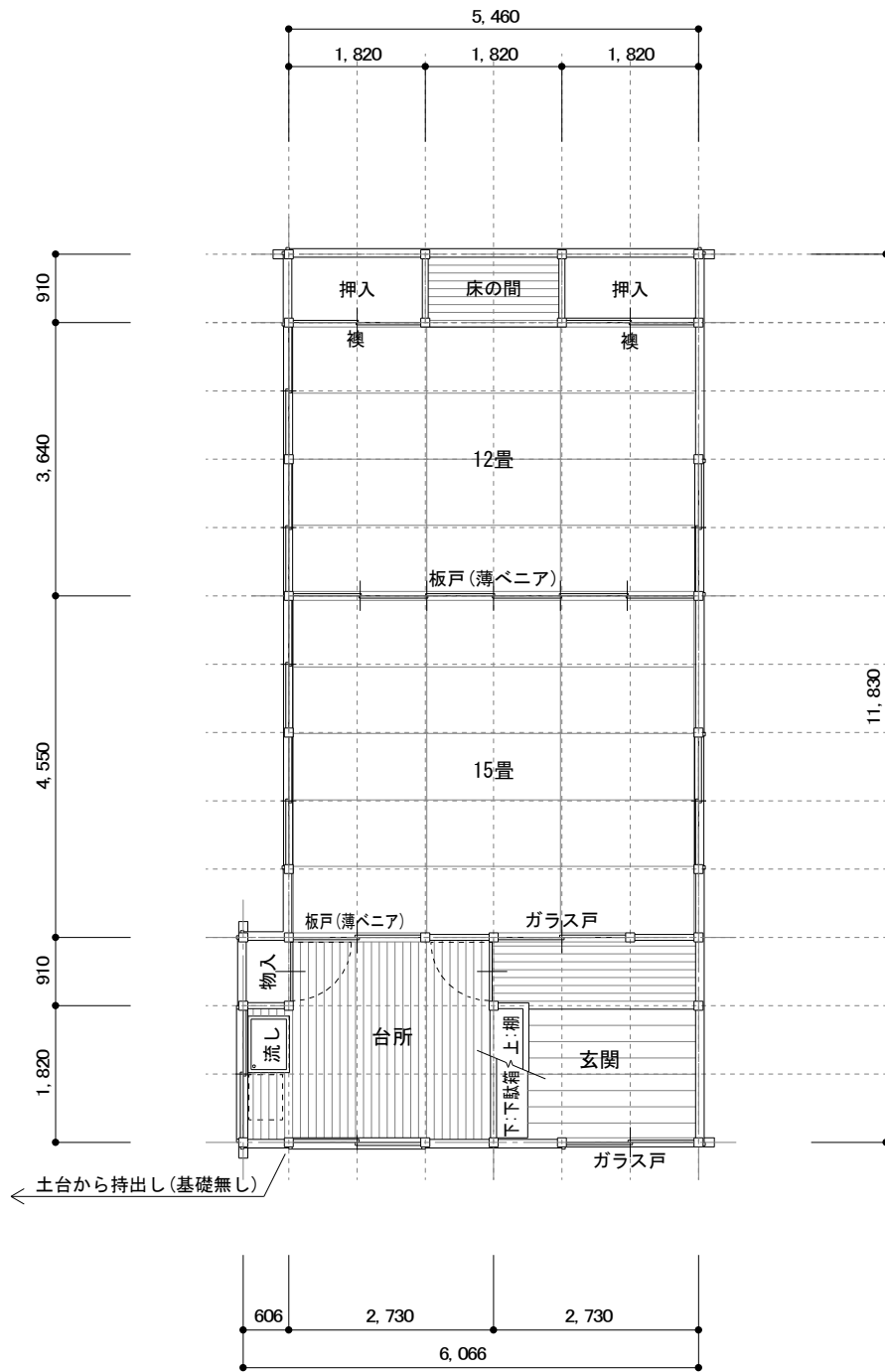


面積表

	床面積	建築面積
校舎棟(便所・湯呑所・宿直室含む)	217.79㎡	220.27㎡
増築便所棟(作業スペース含む)	19.87㎡	19.87㎡
合計	237.66㎡	240.14㎡

※建物間の通路は面積に参入していません。

調査日：R7.4.14、及び9.11



- 栗材と思われる丸太杭(直径100~150程度)を打ち、その上に土台を載せている。(基礎無し)
- 分校から数m下った場所にある。

◆ 床面積及び建築面積 : 66.25㎡

調査日 : R7.4.14、及び9.11